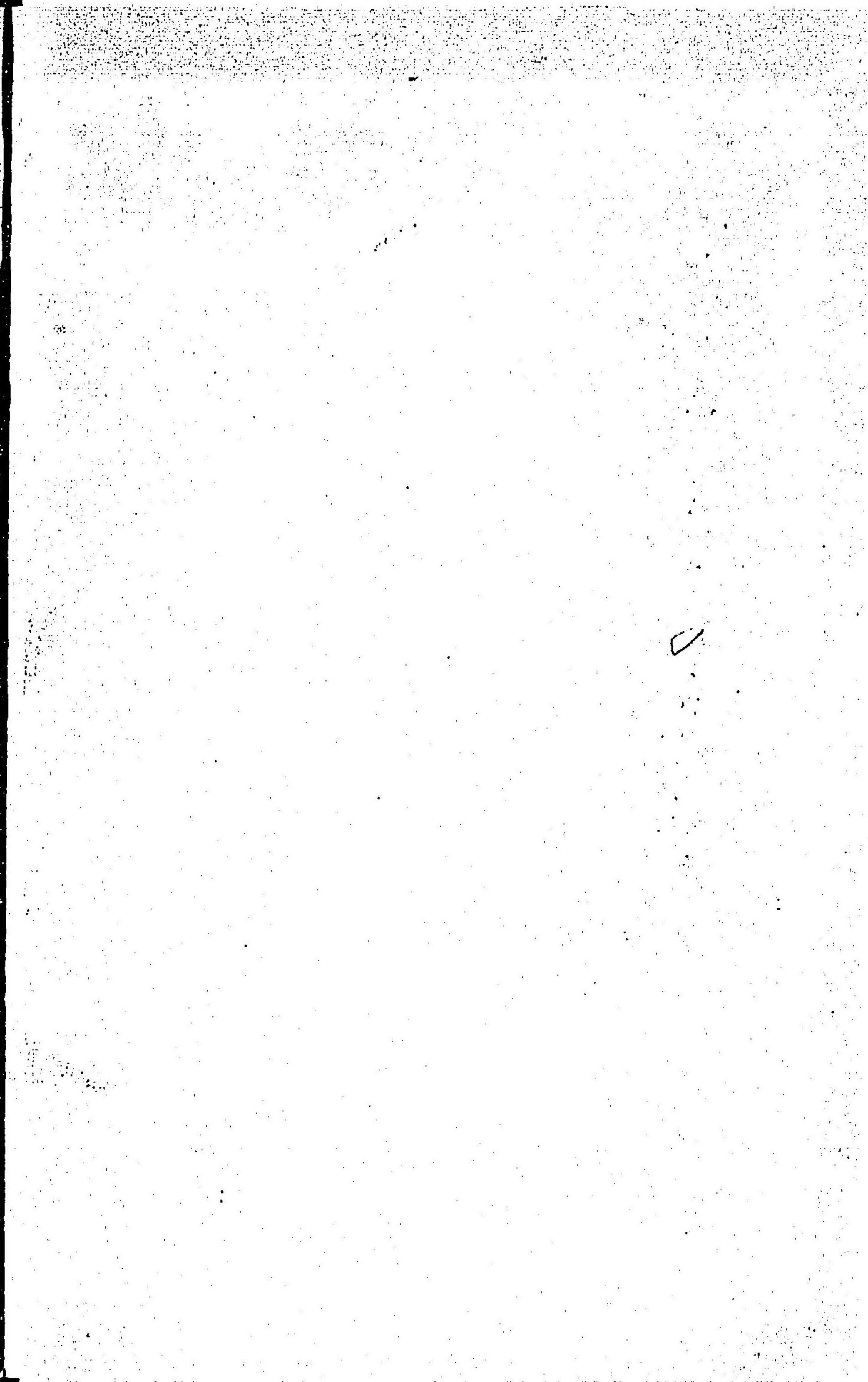
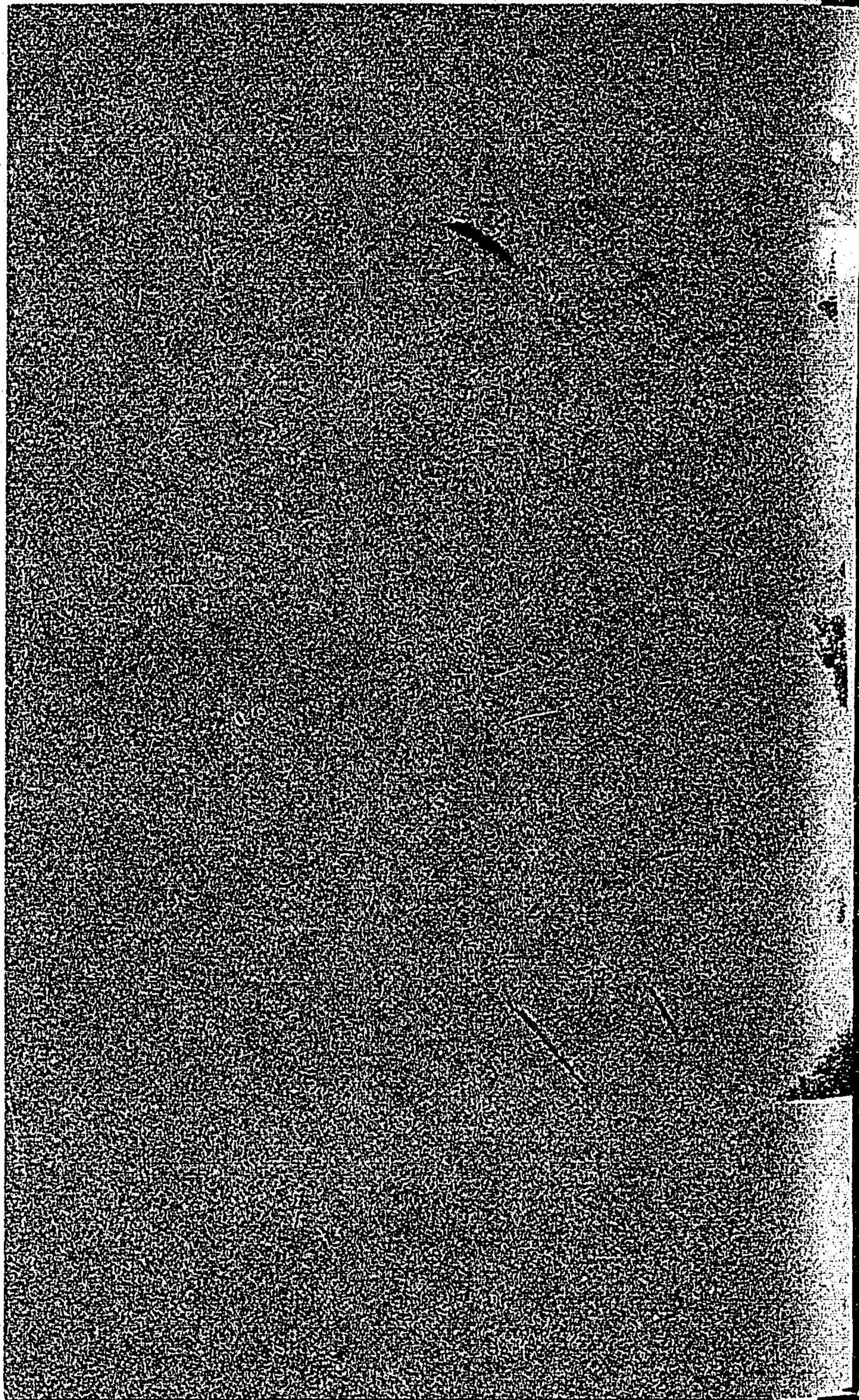


斗 B 78

日本歌道全集

第十二編 目録
悦目抄
此の巻の抄
新編
調子
調子





911.108
N.6852 R



25.11.12

二六五

精

酒

正四位利登



お水のそそる人の玉より徳を以て
と冬に議為相は後きりまじぬ
く河を我國乃上古より是郷
上下とありよきちりはるるは
に下ていりてとこのた乃
ゆらへし時いありきつあ

まよまよの棟梁の人を授け
満道泰とて方々をめぐりて
新なる又と造りてしるに
堂を交りての匠とて名
天より下よりまよまよ
らのまよまよの力を授け

水ぬきの人をきぬへちひん
山子千記集つ所化集子代田集
室田集かもとを撰ひはると
徳書のおり字すめらるに
去年乃十月又古きあし集を
能注さく越名ひらして子息

位 位 位 位 位 位 位 位 位 位
書 書 書 書 書 書 書 書 書 書
年 年 年 年 年 年 年 年 年 年
之 之 之 之 之 之 之 之 之 之
位 位 位 位 位 位 位 位 位 位
之 之 之 之 之 之 之 之 之 之

ヨウモルを素四十歌の標注字
前へ去へら水へありあをれく
父子むつまへつゝの及字をた
すぬらりるやうに五條之位
系極黄心のりへ入もせぬ
てらるなりとるに平仮名

すまふありしは、何れも、
平、さう、た、あ、え、ゆ、ん、を、
あ、の、力、大、あ、り、ま、す、と、い、
ふ、ふ、り、も、あ、り、し、ま、す、と、い、
ふ、ゆ、り、も、あ、り、し、ま、す、と、い、
議院議員中村位三

佐々木弘綱
佐々木信綱
校

悦目抄

東京博文館藏版

日本歌學全書第十貳

緒言

悦目抄

悦目抄の著者

悦目抄の、藤原基俊の著にて、一名和歌心撰抄とも更科記ともいへり。

歌にかゝはれる事ともくさくを載せたり。其説の中よりのと打かた

ぶかるゝふしきにしもあらねど、歌學の未開けざる時代なれば、玄ひ

てとがめいふべからず。基俊祖父の堀河右大臣頼宗公、父の正二位右大

臣俊家公にて、從五位左衛門佐あり。崇徳院の保延四年、薨髪して、法

名を覺舜といへり。此時八十四歳ありき。生得文才ありて和歌をよくし

又兼て詩をもよくせられたり。俊成卿も若き時のその弟子とあられたり

き。もとより家がらの人ありしかど、我才學をたのみで、みだりに人の

歌を批難する事を好み、人に傲られし惜むべき事なり。著述の書、新

歌仙、新撰朗詠集、相撲立等あり。

基俊の略傳

基俊の性質及著述の書目

無名抄

無名抄の著者
長明の尊師

無名抄の有益なる事

無名抄の、鴨長明の著なり。長明の賀茂社の氏人にて、幼名を菊大夫といふ。和歌管絃に達し、又老莊の道を極む。此抄の其時代の人々の雑談逸事を記して、歌學のたすけとなり、考証の益とある事最多し。歌に志す人、此抄を再三よみ見ば、歌の上にとりうる事必多かるべし。猶長明の事の第七編に其家集を載せ、緒言に其傳をも載せたるを見て知るべきあり。

にひまかひ

にひまなひの著者
賀茂翁の略傳
翁の歌論の書

新學の、賀茂眞淵翁の著あり。翁姓の岡部、縣居の其家号なり。荷田東庵宿禰の門に入りて、皇國の學を極められ、其名天の下をればひぬ。翁の歌の事を論せられし書、此書の外に歌意考一冊あり。我著はしつる歌の葉の附録に載せられ、そを引合せ見て、翁の歌の意見を知るべし。

新學異見

新學異見の著者

其異見よつきての意見

香川翁の略傳

新學意見の、前にかへげたる新學の異見を、香川景樹翁の記されし也。其意見によつきての今かるべくしこれをさだめいはず。見ん人この兩書をあまた度よみ味ひ見てさだむべき也。景樹翁號を桂園といひ、屋の名を東鳩亭と呼べり。因幡國鳥取の人荒井某の次子あり。京師に出て香川黄中に従ひ歌を學び、遂に其養子とされり。翁の歌における功績の、あまねく人の知る所なれば、煩ひしきを厭ひて是を掲げず。

歌がたり

歌がたりの著者
村田翁の略傳

其性質の事
歌文に秀てられし事

歌語の、村田春海翁の著あり。翁姓の平にして、號を琴後翁、家の名を錦織齋といふ。もと江戸の商人あり。父春道歌を善くし、賀茂翁とらうるはしき友なり。兄を春郷といふ。兄弟ともに幼き時より縣居翁に従ひて學ぶ。春郷世のありはひを厭ひ、家を春海に譲りたりき。春海人とあり豪放にして、又家の業をつとめず、常に客を好む。春海最歌文に秀づ。其文一家の體をみし、世人紀氏以來の能文と稱す。家集七卷琴後集と云。

歌袋の著者
富士谷父子相つ
ぎて歌學の名匠
たりし事

其家風の事

調の直路の著者
八田翁の事

歌ぶくろ

歌袋の、富士谷成壽ぬし後に御杖の著なり。北邊成章主の子にて、父子相
つぎて、當時歌學の名匠たり。其學風は、古學家の說をも折衷しながら
始終京家の說をたてられ、あらはに是を取れる書の作り出す、程よく辨
護して、又己が意も見ゆるさまにかゝれたり。其志思ふべし。此書すべ
て八卷あるを、今の六運六則五体の三條を抄出しつるあり。

調の直路

調の直路の、八田知紀翁の著あり。翁歌を桂園翁に學べれ其高弟として
世に名高し。此書短篇ながら調といふ事をいとよく説き盡くされたりと
おぼゆれば、こゝに載せつるあり。

以上の書ともに、評詞を加へて、其說をさわりいふべきを、その近きほどに歌學評論といふ書を著すべければ、其書にいんきて、殊更にはぶきつる也。又にひまふびの標註は、原本にありつるを、さかづら掲げつるにふん。

悦目抄

佐々木弘綱
同 信綱 校

寛文六年刊本に
更科記と題して
二冊とし、下に
上巻と題せり
かたきにの字あ
り
文木にはの字あ
り
心の一本に心
さいふのさあり
ならひてをなら
へはさあり
いへりの下一本
に是本文也とい
り
心の上一本に心
のれがさあり
たさい心の云々
りさいのさいふ
てさい一本に心
あり
心一本にあさ

それ歌のよむ事のかたきにあらすよくよむ事のかたきなり。
一切の藝はよき師匠にあひて學ぶに、むなしからずといへり。
その心の上たる事をあらひて、かならず中たる事をうといへ
り。まかるに、此歌の道におきて、人の教によらず、心の發する
所也。たゞ心のいたるといたらざるどがいたす所也。心をいつ
たふる事あるべからず。されば父堪能なりといへども、子かか
らすしも其心をつがず。師匠風情を得たれども、弟子又其風体
を寫す事あり。其ことありといふとも、其心ざしにあらはれ
がたし。心に、よきやうをもあしき様をもまける輩も、人に教

あり
得たりとも一本
に似たりといへ
ともさあり
歌の下一本に
見しりさあり
心ふかき一本に
ふかき心さあり
歌の下一本
にみしりさあり
打案して云々
り我さいふまで
一本にふくまで
まん心にもて
しさありさて心
の内にの下もた
せての四字なし

ふるにちのら奇し。されの歌を心得る事、よむよりの大事也。其心ふかきを去らずして、其ふかき心をよまんこと、かたかるべしといへり。歌をこゝろうる事、第一の秘事なり。これを心得んと思ひ、よき歌をうち案じて、その歌をわがよまんずるこゝちに、我こゝろのうちにもたせて、天をもはしらかし、山野河海をも思ひめぐらせば、心得られ侍る物也。すべて歌の悉くかき事なし、堪能の人、たびごとに秀逸にあらす。さしものなき人も、よき歌のよむ也。但それのよめども、歌の体更に上手のものにおきじからず、かひりたる也。歌をよみ心うる事、此道の至極なり。この道に長せん人の、あきらかに見るべし。歌のいかかる人も、心うる事なれば、我心によしと思ふ事、あれども、たゞそれのあらざるにおきじ。歌をよまんと思ひ、此道をふかくそべし。たゞ詮ずる所、万葉集よりはじめて、三代集を見心

よくわろきを一
本にあしきを作
れり
古今以下の説
はかたくなに過
たりさるへから
す
いろは云々寛文
本になし

得て、ふるき言葉によりて、其心をつくるべし。いはよき言葉も、よくわろき詞も、あし。たゞつゞけがらに善悪のある者。万葉の詞なればとて、こはくあしからんをよむべからず。古今によめばとて、ちるそめでたき、わびしらよ、べらあり。あといへる詞の、よむべきにあらすといへり。
一物を假字にかくやういゝろはにいはく、
いろはにはへどちりぬるをわかよたれそつねならむうゐ
のかくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす
上にかくい、下にかくひ、口合にかくゐ。
上にかくわ、下にかくん。
上にかくお、下にかくを。
上よかくう、下にかくふ。
上にかくゑ、下にかくへ、口合にかくゑ。

各の已か定めた
るつかひさまを
いへるなるへし
このかかの脱い
と物さほしやく
ふたぐさにかい
ふへからず

これらのかのがまやうによらぬいづくにもあれくるしか
らす。

一大かたかきたがへてあしかるべきかなの事

上にかゝざるこ。下にかゝざるま。又上下を嫌はず書くこと
も有り。上下をわかすかくべきに。下にかゝざる。上。上下を
わかす書くべき。上にかゝざる。上下をわかす書くべき
へ。上にかゝざると。上下をわかすかくべきと。下にかゝざる
か。上下にわかすかくべきも。下にかゝざると。上下をわかす
書くへき。下にかゝざる。上下をわかす書くへきを。下
にかゝざると。上下をわかさる。例。下にかゝざる。上下を
わかす書くへき。上にかゝざると。下にかゝざる。上にか
くけ。上下わかぬき。下にかゝざる。多。上下をわかぬ。上にか
かゝざると。上下をわかぬ。下よかゝざる。例。上下をわかぬ。

此脱いさくめ
てたし
思案し一本に思
ふへしとあり
まかなり云々
文本文にしかなれ
はれさり奉るへ
きにあらずさあ
り
いさかも云々
より下一本にな
くて下の段に引
つきたり
せられぬ寛文
によまれぬさあ
り
るさ有の五字
一本になし
もさめよ一本に
もさししてさあ
り
かたさしに
句さいふ初句
と三の句をし
いへるなるへし
し云々此句一
本になし

わ。下にかゝぬ。上。上下をわかぬ。上にかゝぬ。下にかゝぬ。
み。上下をわかぬ。上にかゝざる。上下をわかぬ。
一歌をくゝりよむ事種々の秘事故實あり。先歌をよまん時
思案し、人丸赤人も心より出給ひぬれば、我等とてもまかな
り。おどりたてまつるへからずと、たかき心をつかふへし。
さゝかも卑下しつれぬ。せられぬ道なり。

一歌をよまんに、歌をさきたつる事有べからず。先題に付て
縁の字をもとめよ。三あらば三所にかくべし。二あらば二
くたひくゝに、文字のかたと、こしどにかくべし。一あらば
一ふし歌によむへし。縁の字なく、縁の詞を尋ねておくへ
し。縁の字をもとめずして歌をさきたつること、材木なく
して家をつくらんか如しといへり。縁の字といふ、秀句さ
り。縁の詞といさしたる事のためよりあることなり。たとへば

一ふし歌のひさ
つしきの歌にて
ふしなきをいふ
秀句さばかけ言
葉をいふされて
いふ意なり

これを心得へし
の七字一本にな
し
くさりての銀り
つしけたるを云
去りの實なり
すくよかの健也
あひすくる心
詞さにも勝る
也一本にあひく
するさあり
かたち宛文本に
すかたさあり
めつらしけに
一本にめつらし
くそなへかさ
あり
歌枕の名所枕詞
またの序なきを
なへていへり
あらねさ一本に
なき歌人もさあ
り

わろき事に云々
一本に大にわろ
き事なりさあり
あらはさハ一本
にあらはす事ハ
さある方まさり
ぬへし
ことやうの云々
一本にさいふや
うのこさはをよ
三句の間にさあ
るそよき
かくての宛文本
にかくてそさあ
る方よるし
秀歌に云々一本
よ昔より秀歌の
中にしりまた見
さるなりさあり
此まに云々又
一本にこれを心
得てよむへし
あり
老楓病の楓の字
宛文本になし
わろき云々一本
よあしきさい
へりさあり
かやうの難をさ
あり

秀句といふの物をかねたるありなみのよるくめもあ
すどつしけつれの浪のよせどもよるの夜どもかねたるあ
り。是体の事を縁の字といふなり。縁の詞といふの秀句にあ
らで、たゞ事のたよりある事也。たゞへハ沖津波たちこそま
されなをいふやうある事なり。これを心得べし。

一歌のすべて心ふかく姿きよげにて心あるを勝れたりとす
といへり。言葉おほくくさりて、まぢを得ざるのいとわろき
也。一すぢにすくよかによむへきなり。心詞のあひすぐる、
事かたくり、まづ心をとるべし。つひに心ふかゝらすのすが
たをいたはるへし。其かたちといふの、うちきくの清けにて
ゆる有て歌と聞え、もしのめづらしげにまたる也。どもに得
ずありあハ、古人おほくの本に歌枕をかきて、末に心をあら
とすさまをせんよめる。まかるを當時のさしもあらねど、は

じめに思ふ事をいひあらにして後に心得ぬ事のみ侍るが
おほし。わろき事にせんすある。今これをいふに、本に歌枕を
おきて、末に思ふ心をあらにせん。たゞへハ久方の月ども、空
ども、あし引の山、おしてゐる海、玉はこの道、天さかるひさ、こと
やうの事どもを上三句の間にあきて、下二句に思ふ事をい
ひのふべき也。かくての歌のさま、たけありて、ふるめりしく
いひまれり。ときこゆるものなるべき。又はじめに思ふ事を
いひあらとしたるの秀歌にせんあり。わろき事にせん侍る。
此まに心得てよみ侍るへきものあり。

一和歌の式にハ、一首のうらにこめおもひたる事もさく、いひ
もらしたるをハ老楓病と申たる也。かるかゆるにわろきと
ハ云にこそ、かやうにまじりぬれハ、ますくわやまりなかる
へし。又ははく、こりくいやしく、あまりにいらかなる詞

たにいらか尋常に
ありはやうなる意
あり
なりとも一本に
にてもわれごと
あり
それの下寛文
本に申すにこれよ
きばすさあるうよ
あり
あちきふく無益
ある意あり
いやしき歌寛文
本にいやしきさ
まふる歌さあり
耳にさるかしき
一本に耳をおさ
るすさあり
されの云々の
詞の歌の肝心也
一本にあり

などをいよくはからひ去りてすぐれたる事にあらすのよ
むへからす。すべて古く人のよめる詞をふしにまたるわろ
し。一ふしなりともめつらしくよき言葉をよみいでんと思
ふべし。古歌を本文としてよめる事あり。それにおよばず。
べて我のおぼえたりとおもひたれども、人のあまねく去り
がたき、かひあくなんあるある。むかしのやうをこのみよ
みいて、我ひとりよしと思へども、なべてさしもおぼえね
ば、おちきあくせん有べき。また歌まくら貫之が書ける古詞
日本紀風土記國々の名所によみつへき所を、これらを見
るへし。いやしき歌に、縁の詞もわろし。ましてかもしもら
しなどよめるのかたはらいたく、目にたちて耳おどろかし
きものあり。古人のよめる詞をふしにまたるのわろしとい
ふは是なり。さればかくのごときいましめ、歌の肝心なり。

ちかき世の歌一
本のまこと近
代の詞の体を見
れはさあり
侍れども一本よ
つるやうにさあ
り三代の下集の
二字あり
ふるき歌の上一
本に古歌な歌
枕よ置事はしめ
よも申たれども
かさねて是をし
るすたさへは。
さありて一の字
なし
教久しくなれり
一本に教へたか
れた。あり
たいの上一本に
幾度も申すやう
ふれどもさあり

ちかき世の歌をみれば、ふるきまでをいはず。きのふの歌を
今日の風情とし、けふの風情を明日の題目とする也。たゞこ
ひねがはく、いささにも申し侍れども、万葉集よりこのかた、
三代勅撰三十六人の家集をも見て、其中にすぐれて優あ
る詞をとりて、ふるき心をまなぶべし。
一ふるき歌の第一第二句をとりて、今の歌の第三四の句にお
き、又ふるき第三四の句を、今の第一二句におく。事先達の教
久しくなれり。かくて上下をちがふる事も、又たびかさされ
ば例の事よみゆ。又花の歌を本として紅葉の歌にあらため、
雪の歌を取りて霞の歌によみかえたるを見れば、題目の
あらねども、心詞すべて本にかはる所あり。たゞ花の歌を花
よ、月の歌を月に、歌をはたらかさずして、まかも其心をかへ
て、其心をめづらしくよまんと思ふへし。又ふるき五字を七

なし一本ふすこあり

一句こそあれ一本に一句にこそよみたれさありにや一本にありさあり

これりハ故事原因を云

又樂府云々一本に樂府にも一則詠よも詩の心云々ありて別の段させり

字になしたとへい五言詩を七言につくるか如し。七字をも五字につよめもしの七字を二句にかけてもよみつべからん詞をかきらす古歌に一句こそあれといふ事なくみたりてもよみつべきにや。かゝりていかにしてちがふる所あるべしともみえず。大かた本歌にすがるといふの、其心さしをたゞ天にひかれ地にかゝれるものゝことし。日本紀の名所などいづねにみるへし。おほきある歌の本懐也。風土記にいみじき事のおこり、山川の名のおこりくしくみえたり。ある山にい何といふ草木あり、河がれたり。此野にい何といふ事あり、草かひたりと云るしあり。浦にい鹽やきめかり貝ひろふとまてに云るせり。又國によりて風俗のかはれる異名もみゆめり。又樂府朗詠などの中ある詩の心さといふ風情のつからよりきたらん時のよむへし。

まはして心をよむの題の文字を其まよによまて同じ意を婉曲によむへしと也

荒涼すゝるなる意あり

一題をよく心得べきやう題の文字の三字四字五字ある題も、かならずよむべき文字、よむへからざる文字、まはして心をよむべき文字、さゝへてよむべき文字のあるを、よくよく心得よむべき也。心をまひしてよむべき文字を、唯あらはにのみたるもわろし。たゞあらはによむべきを、まひしてよみたるもくたけてわろく聞ゆると、師匠も、古人も申されける。かたられし。かやうの事ならひつたふべきにわらず、我心得てよむべき也。これらの題をみるに、題にかきらすよむべき文字といふの、天象、地儀、植物、雑物などを、題のまよによむべきよや侍らん。關をよまんにい、かならず其名をさしてよむとを先達の申されし。まことにたゞの野山こそあれ。その關と顯のさでの荒涼あるへし。又櫻といふ題にて花とよめるとがなかるべし。かならずよむへからざる文字といふたど

寄題の類を云

さいへてはすぐ
そのまゝの意
なり

このあたりの教
いさよし

への口傳ありていはく野外河邊などのやうの題に外邊又
寄題に寄の字又述懐の述の字これらにさすがよ人よむ事
かければあるすにれよばすまはして心をよむべき文字と
いすへてことばの字なりたどへば鶯聲稀を申さん題に
さいへて聲稀ありさといよむべからず念あかるべし。たゞ
かく日すくなしども久しく聞かざりつるに今こそ珍らし
けれをよむべき也。又稀にいふ事をよめらんふるき歌を
本文として其心を取りてよめらんいみじかるべし。また年
にまれありさといふふるき詞とりたらん。さいへてとり
たりどもふるくよみきたれる詞にてとるども聞えざるべ
し。たゞ題にすがりてかく鶯の聲ぞまれなるなとやうによ
むまじき也。又郭公幽などいん題にかすかありとよめら
ん。本意なかるべし。ほのかに聞ゆるなどやうに詞をもと

めて雲井はるかにすぎぬるどもをちの里にのさたかにこ
そきくらめども心をよく思ひつゝくべきにや。又月前遠情
など申さん題にどほき心のさよみたらん。あるへきに
もあらず。月を見は更科嫉捨も心にうかび。唐土までもへた
てす思ひやらるゝさまをよむべきにこそ。これを心みてよ
むへし。

一 深雪などいふ題をえてふかしとよめらん。心うかるへし。た
いふみわけがたしどもかきわけてなともふかき事をたど
へてよみたらん。いとやさしかるべし。すべて戀述懐の題
にかやうの事おほかるへし。是にあそらへてあるさす。これ
のかあらずよむへからざる文字に同じけれど、かれのすべ
て心をまてさぬ事なれば各別にあるす也。又さいへてよむ
べき文字とあるのかあらずよむべき文字といふにこそ。

なそらへては准
して也

おなじからぬ。かのつから題によりておもひわくへき文字
 もや侍らん。又春夏秋冬とあらん題を得て、題の字のまゝ
 にもよみ、其時の景物をとりてもよむへし。かくの如く先達
 みあかよひしてよめり。おほかた題をえてよまんは、題の
 ほかの事をよまじふべからせ。其題のことわりをよく卅
 一字によみつべし。但題によりてよみ加へたるもくるしか
 らぬ事もあり。よくし思ひはからふへし。

雪ふり寛文本に
 雪消えさあるそ
 よき又体をふさ
 ことあり

むすひ題さハ題
 の文字三字四字
 五字なさあるを
 いふたさへハ初
 春霞なり云やう
 の題なり

一立春といひん題にて、霞たち雪ふり氷どくる体の事のみな
 春のはしめの景氣にて、題の外の物とも見えぬ也。百首など
 よまんは、かたのらの題に霞のあらんに、立春と早春と
 の歌に、霞あらぬ風情をめぐらさんと思ふへし。是にてい
 づれの題もおしはかられぬへき事に侍れば、かすくにま
 るさず侍り。又むすび題をば、一句にこのめよむべからずと

歌にして歌面に
 て歌のすかたを
 いふ

けたかくはたけ
 高きをいふ

おほろけ大方一
 通の意あり

本の手本にては
 人さよむへし

ぞ、先賢のいましめの侍りける。大かた歌のよきといふは、心
 をさきとしてめづらしきふしを求め、詞をかざりよむへき
 也。心あれども詞飾らされば、歌おもてめでたしども聞えせ。
 詞まさりたれども、させるふしなればよしどもねばえせ。
 めてたきふしあれども、優ある心詞具せねば又わろし。だ
 かきとおもしろきひひとつ事にすべし。是をぐしたる歌の、
 末代に、おほろけの人よむべからず。此歌をぞ貫之がさき
 に申しつる如くの事、具したる歌とて、歌の本とすべきと
 申し傳へ侍る歌。

風吹けは沖つ白浪たつた山夜半よや君か獨こゆらん
 是のおほろけの歌あらんに、貫之か新撰髓に、歌の本と
 すべしと信をとるべしや。大かた歌をよむべき有様、彼髓
 にもるゝ事なき也。あまたの跡さまくにまゐるせるその中

此歌の如く云々一本
 縁の詞を侍る
 歌の詞を侍る
 へき也よみ侍る
 れは又も心につ
 へし又も心につ
 はすれも心につ
 らすれも心につ
 も侍りて心につ
 事にて心につ
 ねか心にも心につ
 ひな心にも心につ
 りし古歌も多き
 也さあり
 したに心につ
 ちの意也

此歌の如く云々一本
 縁の詞を侍る
 歌の詞を侍る
 へき也よみ侍る
 れは又も心につ
 へし又も心につ
 はすれも心につ
 らすれも心につ
 も侍りて心につ
 事にて心につ
 ねか心にも心につ
 ひな心にも心につ
 りし古歌も多き
 也さあり
 したに心につ
 ちの意也

こし註する處也。詠のくもをどれ。題の何のちにもあて、歌
 の二行七字に書く也。もしの三行三字、三首にのみあれ、二行
 七字に書く也。五七、五七七とかく也。年號の奥に書く事あれ
 り、わたくしにの書へからず。名のりの一番の題の下邊にさ
 げて書へし。歌に又善悪ありたどへの口傳にいふ。これの歌
 のわろき本として頸され歌にてよむまじき体を注せ。歌
 五月雨にまらぬ。楠木の流れきておのれと渡す谷のかけ橋
 此五月雨にまらぬとよめれの縁の字もことばもなくされ
 たる物なり。腰をれたるものはふくもありくべしくひ
 されたる物の命あるまじきとて、最いましめぬるしとすと
 いへり。この五月雨の歌の本語の題に、かやうにそよむへ
 きとて、師匠の教へ侍りし。
 五月雨のふるの高橋水こえて涙はかりこそ立渡りけれ

此歌の五月雨に縁の字詞わひかねて侍る歌也。是にて心う
 へし。
 一歌の人によりてよみかふべし。兒と女との歌の、あまりにつ
 よくこはきはしたなし。されのとてどらへたる所もあき
 正躰なし。おもてなだらかによみかして、またにをかしきふ
 しあるべし。僧侶の歌の胸腰すそをよみ、縁の字縁の詞をす
 系、假字をいたり。假字をえり、異名を心え、たすけ字を存し、
 やすめ字を心え、假字をあまます。詞の上下をせす。縁をとほ
 のけず。上下を心得て、ひとつとして欠けぬを秀歌とし、かけ
 ぬるをわろしとす。むねこしすそといふは、はじめの五七の
 ひゝさのむね、五七五と七々のあひのこし、七々のあひのす
 そ也。此三所にえんの字にても詞にてもすうへし。たとへば
 縁の字縁の詞といふは、

二行六の三字寛
文本になきな
しらす

六行 惜むどもかふましろの應おればそるをいえこそ留めさりけれ
此えんの字をむねこしそそよすゑつるをよき歌とすと。こ
れぞたくみの歌の本ある。

一又えんの字を腰にすゑすして、かた／＼にすゑたるを、す
そよわき歌とす。又腰ばかりにすゑて胸すそにすゑざるを
い、一ふし歌とて、好み讀む人も有る也。又發句後句に、めい句
對句をすゑて、腰につのる歌もあり。これらわかのづからあ
ささふかき事いあれども、みか歌のすかた也。えんの詞もか
くの如くまづらひつれい、たゞこと歌と名こそかはれども、
ささのたぐひにおどりまさりあるべからず。このやか腰を
れとて、歌に似たる物おから、歌をやつすすて物也。腰をれ
にあまたの品あり。一にえんの字をこしにすゑせして、あ
まじひにかた／＼にすゑたるなり。一に發句後句に物を

さきのたくひに
寛文本にさきの
たくみの歌よ
さあり

さら／＼寛文一
本に更にさあり

みつからの下の
文字一本にあり
知らすなのない
助辭なり

けすしき品のわ
るき意なり

えるハ撰ふなり

いひきりて、腰をは別にちしたる也。一に緑の詞を腰にす
ゑすして、なまじひにかた／＼にすゑたる也。此三の腰折に
まよひて、さら／＼いでこぬあるへし。是をよ／＼さどり
て、人のかしこきおろかあるをもはかり、みつから、歌をもよ
むへきあり。是を知らずをあらん、和歌の道を思ひとよま
るへき也。よく是を思惟そへきと也。

一假字をいたはると云い、げすしきかきを句の末に置かじと
いたはる也。げすしき假字をすゑじと、ぬ、た、れ、そ、是也。句の
末どの發句後句のをはりの假字也。又いたはらんとせんに
句もみだれぬへく、歌も損しつへきをいゆるす。たま／＼も
引おほしつべきを、さておきつるをおろかなりとす。此心の
奥に注す所也。歌をもつて委しく申す也

一假字をえるといふの文字也。の文字のやはらかなる中の

鄰もいふたばらの歌をいへるなるへし
くしハ具しなるへし

やのらかなるかな也。二を撰のの文字をとるへし。
一異名を心得よといたどへばほどゝぎすとあらんに、となりもさしあふべく、の、までのた田長もくしたれども、くるしからず。たどへの名とあつとをつゝけていふ事もあり。名のりど名にても、一にて事たることもあるか如し。これにてよろつ心えつへし。奥にまゐるすへし

満のりしの上二木又の字あるに從ふへし

一たすけ字を存せよといふの、きき、みき、はき、もき也。谷ふかきとわらんに、こはくも聞えとありもさしあひ、谷ふかきどかふべし。みき、きき、のおおきじひよきの假字あり。又出し月かかきといふべきを、こわくも聞えとありもさしあひ、いでし月かきとよかふべし。はき、もき、のつかあき、はをばたらかせて助くるがゆゑに、たすけ字との名つくる也。みちぬらしとみちぬらんとかへよむ也。

いきたのしくを寛文本にいきたしくさあり

一やすめの字といへるを心得よといふの、ま文字あり。たどへの、

郭公なくや五月の短夜も獨しぬれ、わかしかねつゝとあるをねたれば、とげすしき假字あるがより、あひて、いぎたのしく聞ゆれば、ひとりしぬれば、のやすめたる也。われとし、人とし、いふとし、みとし、き、とし、あせやうのじ文字也。きはめてやさしき字なり。

物を一本になし
ふんくハ云々
さいふに同じ
具するハ添ふるあり

一假字をあまさすといふの、ものを三十一字にいひはて、今一字を假字たらずして、なんくとしてや、まてよあせせんあき假字をぐする也。この歌の証歌に云、

まくはらす寛文本にまつらすとありいつれにてもわきかたし

花の色をあかず見るとも驚のねぐらの枝に手あなふれそも手なふれそといふ事也。此てあゝがわるきあるべし。一心をあまさすといふの、たへある事をまくららずしてさき

にいひはて、句をたさんとして、いたづらある私曲の事をよみぐするをいふ也。是のやすく心えらるゝ事也。先の手あふれその心也。たゞ手あふれをいふべきを一字たらぬによりて、なゝの字をいゝ也。ふれゝのちと申したるの、同事あがらみじく聞ゆるあるべし。

一詞の上下をせざれといふの先に云へき事を後に云これ也。たとへ久堅の月といふへきを、月の久かたといひ、たちをのちゝちと云へきを、父のたちをといひ、足引の山を、山のあし引ちと云也。是のたゞ一事に心えらるゝ事なれ、委細なるさす。

一縁の字をどほのけずといふの露とあらば、やがておくとも、かゝるども、又はらふともつゝくへきに、ちんくとしておくとつゝけつれの縁もどほのき、詞もへたゝりてあしく聞

やめていすく其下への意也

ゆる也。又ちかづけんにかきはす、近づけられぬをバゆるす。たまゝも近づけつへきを近づけざるをわろしとす。

一上下を心えよと云ひ、上下につきて二あり。一にの秀句、二にのきゝ、まれと云。秀句の上下と云ひ、たとへ、梓弓春の櫻のちと云につきて、あつさ弓につきて、春の詞のあらはれたれ、ばうへ也。櫻と云につきて、すゑとも思はせたり。是のかくれたれば、またとす。是を心えてよむを上下かきあはせてよむといふ也。又さゝまれの上下と云ひ、こゝをいはんとてかしこを云是也。たとへは我身のこがるゝ事をいはず、紅葉船などにおほせて云事也。もみち葉のこがれてものゝかかしきいなど云につきて、おもてにたつる紅葉のうへ、かくしたるこがれのまた也。是をかねたるをよき歌とす。

雪ふれの木毎に花を咲にける、いつれを梅とわきてをらまし

歌すの下の文、木にこれをかり、たかる歌のあり、たかる歌のあり、歌すの勝さあり、たかる歌のあり

かけあうての音便
なり
古匠一本故師匠
さあり

此歌を上下かけあうて侍るとて古匠も古人のはめけると
ゆされし。まことに有かたき歌也。上下かけあうたる事、末の
世の人よみいはん事の難かるへし。たとへば梅どの、毎木ど
かける、木毎にとよめるなり。いづれを梅とわきて折らまし
どつゝき侍り。めてたき事也。詩にそかゝる事の侍る。

飛魚蹠忽游波鱒 麗鳥囀堀出谷鸕

是なり。

かやうの詩哥の、つくりよむ事のかなふまじき事也。まかあ
れども又思へん、人丸赤人躬恒貫之も心より外のたねあけ
れの、我等とても心をたねにまかせて、苗代水のおもひやる
方なかるべしや。

一これもおなじ心の歌也。

吹からに野への草木の萎るれらうべ山風をあらしといふらん

錯一本に錯又ハ
處さあり又轉ハ
轉に作り輝を旋
りとも儲さも作れ

如くの一本如き
さあり
歌の猶一本ハ猶
の字なし

夏虫の身を徒になす事も一つおもひによりてありけり
かくのまじくの歌のなほおほけれどもかく注するばかり
なり
一さきにも申侍るまじげすしき假字をのぞきいたるべき
事あり。おき所發句後句の中間也。たとへぬ、たれ、そ此四字
なり。此難ある本歌

ぬ 梓弓おしてはる雨今日降ぬ明日さへふらひ若菜つみてん
朝夕に向ふつげ櫛古けれと何そも君か見れどわかれぬ
た 住吉の浅澤小野のかきつゝた衣に摺つけきん日知らすも
たト物の名までよくもさこえず。いはんや末にあらんわ
ろし

た 郭公はつ聲きけのあぢきなくぬし定らぬ戀せらるはた
そ 春の野に萱つみにとこし我そ野をまつかしみ一夜ねにける

それの証歌寛文

本に前後にあけたり

ふみよむハ句の終にたきてにハは也

夏山になくほとゞさす心あらは物思ふわれに聲き聞せそ
 れ 色よりも香こそ哀と思はゆれたが袖ふれし宿の梅をも
 蜘蛛のくものはたてに騒くかき風こそくもの命なりけれ
 一ふみよむへき文字七字あり。きはめてやさしき字也。しもよ
 の、や、み、び、これら也。證歌云。
 忠峯忠見の、どもにま文字を末に置つれの、弱けれどやさし
 といへり。そのまをよめる歌、
 ま 夏の夜をねぬに明ぬといひ置し人の物をや思はさりけん
 偽のあき世なりせいのいかはかり人の言の葉嬉しからまし
 一棟梁の、も文字句の下におきつれの、あきらすつよくて詞を
 つくと申しけるも、
 も 郭公、あくや五月の短夜も獨しぬれのあかしかねつゝ
 一康秀の、よ文字を句の下におきつれの、かきらすよわけれど

詞をつきてやさしといへり。

よ 春日野の飛火の野守出て見よ今幾日ありて若菜摘てん
 よそに見て歸らん人に藤の花はひまつはれよ折るをるとも
 一遍昭、索性どもに、の文字の下によりきての、やはらかにま
 わりてやさしといへり。

の 梅の花それどもみえを久方の天さる雪のなへてふれゝは
 大方の月をもめでし是ぞこの積れの人の老とあるもの
 一中の君の、や文字を句の下にならへてかならずたくみあり
 といへり。

や 天の河浮木にのれる我ちれや見しにもあらず世の成にけり
 思ひ出て戀しき時の初雁のなきて渡ると人の知らずや
 一友則の、み文字句の下にありて、ことばを助くる跡やさしと
 いへりけり。

中のきみ誰にか
わきかたし

けり一本にふし

み 春のさる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそ乱るへらなれ
 住吉の松を秋風ふくからに聲打そふる沖つまらなみ
 一或口傳云、人麿貫之のむ文字のたくみに聞ゆるといひけり
 人麿む文字有てよしとほめたる歌。

む 立田川紅葉乱れて流るめり渡らの錦中やたえなむ
 貫之がほめたる歌。

思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢と知りせの覺さらましを
 風ふけの沖つまら浪たつた山夜半にや君か獨こゆるむ
 但此文字の末におきてすがたまさりて覺ゆると、古人のや
 されけるとかや。又始に書きたる助けの字とすしたるのた
 どへなきみはもむし。此六の文字也。一にのふかきふかみ
 一にの月かのを月かも、一にのみちぬらんをみちぬらしと
 かへてよむ也。

歌の下寛文本に
 人丸云々人麿の
 事さるいひつた
 へ有しにひつた
 後の脱すて此前
 さらす

やすめ字の説ハ
 説ハ取るべから
 す

一やすめ字とて二字あり。われとし、人とし、天つ、國つ、沖つ、是等
 なり。かも、老も、かし、つゝ、ぞもらに、べらある、まに、今はた、
 見渡せの、心地こそすれ、わひしかりけり、嬉しかりけり、是等
 ふるき歌によめばとてゆめ、好みよむへからずと先達
 の、いましめ也。

一安倍清行か式曰、凡和歌者、先花後實、不詠古語、并早陋の所名、
 字物兼名、但花中求花、珠中探珠、云々不譽名所などよむ事ハ
 よく、これを可思惟也。すべてよくはからひて、花
 にいいたびも芳野、初瀬、志賀の里、紅葉にの龍田、月にの更
 級、姨捨、清見、明石、廣澤、難波江にてたりぬへし。是にて何も心
 得侍るへし。名所も左右さくよむべからざる也。

一公任卿抄云、大かた歌のかならずしもをかしきふしをいひ、
 ことこの理をいひさらんときり。されども本よりゑとたい

字物兼文本に寄
 あり

はたれはまたら
也
かつ片一方よ
りの意あり

よみあげたるにも、うちちがめたるにも、おにどなく幽玄に
も艶にも聞ゆるあるべし。よき歌になりぬれり、その詞姿の
外に、景氣のそひたるさまのあるにや。たどへん春の花のあ
たりに霞のたなひき、秋の月の前に鹿の聲をほのかよき、
垣ねの梅に春風のはひをさそひ、峰の紅葉に時雨の打そ
ゝき、村雨の晴行空よ時鳥の聲うちをれ、まがきの菊の霜
枯たるにはだれにつもる雪、且きゆるけしきおとする様な
る事のうかびてそへる也。人毎にすそ様なれども、かの月や
あらぬ春や昔の春あらぬといひ、結ふ手のまづくに、にこる
といひ、春たつといふばかりにや三吉野のといひ、いつはり
のなき世ありせぬといふ。かやうの歌のなにとおくめでた
きなり、すへての詩歌の道も、はかなき狂言口ずさひどおも
へども、みなこれ大聖文殊の御口よりおこれる事あり。とい

初一二同一本
に二三同あ
りて次しかり
落花毎句同寛文
本に句二四同と
あり

きみかみの云々
寛文本に名あり
川春の日記のあ
らはれて花にそ
しつむ此春のほ
さ佐のほとあり
文字ありとあり

へり、まことに胸のうちを出さる風情の、人の教によるべか
らすといへり。

一病をさるべき事、

岸樹 初一二一同 風燭 同句二四同

浪船 五言第四五七言六七同 落花 毎句同

一初一二一同とい、君が代のさかまはしきおといふと文字也。

君が代のさかまはしきと同事也。

一二四同とい、君かみのさかまのみの字同事也。

一五言第四五七言六七とい、君が代の久しきみよの是也。

一毎句同、句ごとに同じ假字あるべし、これら也。

一八病云、

同心 乱思 欄蛛 渚鳴 花橘 老楓 中鈍 後悔
これあり。

第一句の「は」は「は」
第四句の「は」は「は」
の一字同じき也

一同心の詞かとりて同じ心あるへし。これらあり。
 蛩をぶね今を渚によするある汀の鶴の聲さわくなり
 ちぎさどみぎのどおなじ意あり。
 一乱思の第一とじめの一第四句のはじめの一字同也。
 戀しさの同じ心にあらずとも今宵の月を君みさらめや
 一欄蛛の初の五文字の終の一字第五句の終の一字同也。
 櫻ちる木の下風の寒からて空に知られぬ雪をふりける
 一渚鳴の第三句の終の一字終の七字の終の一字同也。
 程へつゝ八重山吹の開けおん戀しき折の形見にもみん
 一花桶の名物類をかくす事也。たどへば菊を題にえて、きくと
 いん事てはくもやあらんと思ひて、きくからにちと詠て、
 きくと知らせんとするあり。月を題にえて、心のつきてきと
 よみて、月と知らせんと思ふ様ある事あるへし。

よみけす事な
ふ事なり寛文本
によみなりとあり

詞の物を見し
るはこれを見し

一老楓の題をよみてやさぬ事あり。たどへば紅葉を題にて、小
 倉の山の下もかくれぬよしをいひてはめ、花を題にて、芳野
 山にもあまるをかりの由をもてあすべきに、たゞ一枝咲け
 るよしとよみけすことをいふ事なり。
 一中鈍の五文字をゆるさく六字になし、七文字を入もじにな
 すを云なり。
 一後悔の心も詞も同じ事ながら、さいひたらば今少しよくも
 やさしくもわりあんと、後に悔いたるあり。四病八病如此。外
 連句の病とて、同じ假字の三つ並ひたるを云也。たどへば春
 のの、夏のの、秋のの、とよばする字あり。是を嫌ふあり。
 又ぬす、ふの字とてきらふ。たどへばいとぬせぬ、あらず、さか
 ずとぬいふ、あらずぬ心のぬの字と、すの字と、二所にいなく
 べからず。是も句をへだてずして、いさらぬ。又てにをの

めなりけるてに
なほさかもさ古
のなごもさより
出たる名にてく
さくの詞の中
下にありて活ら
きをあらはす短
かき詞をいふ

字とて、二所を嫌ふなり。たとへばありて、と有らんには、句をへだてずして、あかりて、どのつゞくべからず。あれ、なともあるべからず。又さるに、どあらんに、かゝるに、どなど句をへだてゝあるべからず。又六文字の病とて、句をへだてゝ、同じ文字を嫌ふ也。是もたゞの言葉のゆるさる。たゞの言葉と云ひかへす詞なり。

五月まづ花立花の香をかけば昔の人の袖の香とする。此香の同じ香なれども、此香をかけたばその香のするさど、あひしらひのあるをば、同じくゆるさるゝ也。たゞとりもつかぬ同じ文字を、文字の病とて嫌ふ也。又同じ文字あれども、心の別々あるの嫌とす。又同じ文字あれども、句をへだてぬをば、いくらもかさねよ。おひ句とてきらとす、同じ文字の心別なるを嫌とぬ證歌。

今こんどいひしはかりに長月の有明の月を待出つる哉。長月も在明の月も同じ月なれども、おか月の月さみの月あり。在明の正しく眼前の月あり、心別あり。この体の文字のきはらず。

一歌に詞の病とて、らんけりおと云様なる詞、おのゝ二所にすゑぬなり。又初の五文字、式物に云、ふるき歌の初の句あらぬをばおぐまじきあり。それもふるくなるとも、めでたき句案じえたらんに、おくべし。いとさもあきをよみいでたらば、見苦しかるべし。歌の初の句がらに、よくもあしぐもあるといへり。

一五下りんとう、五上りんとう、七々上りんとう、七々下りんとうとてさらふ事あり。これまでのあまりにや。又あひの假字やくそくのいんの字のさらふなり。これらの病さらす人

初め句からよ
はしめ句によ
りてさいはんか
如し
りんさういお
る字をあつるに
かよく考ふへし
又あひの假字云
々以下いんの字
まてわきかたし

あたいる云々宛
文本にあたる
ほこいえきあ
るへしとあり

に見えん事をはづべし。又是等の病をゆるさるゝ機もあるべし。いかかる歌を尋ねべし。大かた歌のあたへるはかひいさぬるべし。歌にあまたの歌あるべし。
万葉集に、相聞と云ひ、戀の歌也。挽歌といひ、かきしひの歌也。譬喩といひ、問答といふ、文字に顯されぬ歌の病也。是をさる事ハ髓腦に見えたる如く、あらばかすあまたあり。それくをさりてよまん事ハ、おぼろけの人の詠むべき心得にもあらす。只末の世の人のたもちさるべき事のかぎりあるす也。古き歌にもそれらの病を去りてよめるのすくきし。今もさるべしとも見えす。只同心の病と、同文字の病とをさるべきあり。おきし心の病といひ、文字のかはりたれとも心の同じき也。たとへん證歌曰、
山櫻ささぬる時の常よりも嶺の白雲たちまさりけり

此山と嶺と也。山のいたゞきを嶺と云病に入るあるべし。
三千年になるてふ桃の今年より花さく春に逢にける哉
これも千年と年とを病とすと、亭子院の歌合にさためられたり。

み山にの霞降らし外山なる正木のかづら色付にけり
是又み山と山となり。

咲ざらん物といふしに櫻花面影にのみまだき見ゆらん
是延喜十三年亭子院歌合に、らんの字二ありとて病に定められ畢。

梓弓かしてはる雨今日降ぬ明日さへふらば若菜摘でん
此ふりぬふらば也。これらにかゝる所もおき病なり。此歌のみな三代集に入る。是のたとへ人のかたちのすぐれたる中に、心かくれたる所見ゆれども、くせとも見えぬ如し。これ

ひきちからのひ
き引にや品買
にや

寛文本二に更
科記下とあり

すいろは俗にむ
やみにさいふに
同し

この長短の説ハ
心也かね心地す

らの歌に病われバとていとさしもあからん歌に病さへあ
らんひひさぢからもあくや侍らん。
我戀のひさしき空に満ぬらし思ひやれども行方もなし
此らしどあしどの同じけれどもどがある歌ともさだめら
れずかやうの事ハ雲霞の如くにおほけれどもさのみとて
去るさず是にて心得ぬべし。
一歌にあまたの脉あり。

長歌 短歌 旋頭 混本 廻文 隱題 折句 疊句 誦
諧等あり。

一長歌といひみな人すいろに句あまりて長きを申すその古人
の申しけるとて師匠なりし人の短歌と申されき三十一字
の歌をハ長歌といはれきいかあれば三十一字の短かきを
長歌としそいろにあがきをハ短歌と名付るにや答曰三十

ゆめくこと儀
にハ決してハ
外の儀にの意ふ
り

球はほけれハ云
々よりついでた
る也さいふまで
寛文本になし

一字の歌ハ初の五文字よりいひ出せる心ざしをきらすし
て終の七々に至るまでいひとはせる物なりみじかければ
とて心ざしをきらすしてあるがゆゑに始よりされざるも
のをハ長しとすされハ長歌とすといへりすいろにあがけ
れども短歌と呼るハ事ハ初の五文字よりいひいだせる事
をハうちすてハ縁にひかれ詞にひかれてされゆく物あり
千尋のものあれどもすいろにされぬれば短しとするゆゑ
に短歌とすといへりゆめくこと儀につくべからず此歌
の事ハ子細あることあり三代の御門の御時かされる事
あるなり事多ければ註せず此短歌ハ混本歌をつけたる
也いづれの五文字よりよめども五文字よりよめハ混本歌
になりてよまるハ也又この歌よむやうハ五七五と物のい
ひたきはとよみゆきてさてと思ふ時始の五七五とかきあ

ふやうに七々とどめたり。すなはちこれを三十一字に作り
 なすなり。されば又三十一字の歌をはてに作りなすがゆゑ
 に、是を長歌といはんと思ふ時の、そこをすす事あり。同じ心
 あるべし。可秘々々。此長歌短歌、させる才學にあらねども、体
 をまらせ人に問答の時のために註し侍り。
 人丸短歌

人丸短歌とあれ
 どの古今集に
 のせたる伊勢の
 歌なり

伊勢の海士の伊
 勢みつからの名
 を隠したる也

おきつあみ、われのみまさる宮のうちにとし經てすみ
 し、伊勢の海士も、ふねあがしたる、こゝちして、よらんか
 たなく、かあしきに、あみだの色の、くれなるの、われらが
 中の、まぐれにて、秋のもみちと、ひとくゝの、おのがちり
 く、あかれなば、たのむかたなく、なりはて、とまるも
 のどい、花すゝき、君なき庭に、むれたちて、空をまねかば、
 はつかりの、鳴わたりつゝ、よそにこそみめ

さらの二字一本
 になきたしと

まやが父まやが
 母の誤なるへし

増鏡云々この拾
 遺集に見えたる
 さかき旋頭歌を
 五七五の體に
 其の體の變に
 してまこと七
 頭つらぬへき
 也

是跡の哥おほけれども、さのみとてまざるさす。又詞もかざら
 ずさらことにくされる也。
 又万葉集の中に、十文字ある句を二つへだてたる歌あり。
 うぐひその、かいこのあかの、ほどゝぎす、ひとりうまれ
 て、まやがちゝに、似てあかず、まやがはゝ、似てあかず
 これも多ければ、かすくゝまざるさす。

一旋頭歌といふものあり。例の三十一字の中に、いま一句を加
 へてよめるなり。五文字をもたゞ心にまかせたり。加ふる所
 のよむ人の心にまかせたり。まかあれども五文字の句二つ
 づゝあるの見え侍らず。よまん事もかたかるべしといへり
 證哥云、

増鏡そこなるかけに對ひみて見るときにこそ知らぬ
 翁よあふ心地すれ

中に七文字を加へたるあり。

かの岡に草かる男まかりあかりそ在つゝも君がさま

さんみま草にせん

これハ七文字を中に加へたり。

打わたを遠方人に物まうすわれ其そこに白くさけ

るいなにの花ぞも

是ハ終の七文字をよみつゝけたるあり。さまくゝに多けれ

ども、さのみどてかゝす侍り。

一混本哥と云ものあり。例の三十一字の哥の中に、いま一句を

よまざる也。證哥云

朝顔のゆふかけまたすちりやすき花の名ぞかし

これハ末の七文字をよまざる也。

岩の上になげす松がえとのみおもふ心ハある物を

混本歌といふ名
漢成式にもいふ
こけらにも例を
此の混本はたれ
歌の異名にて旋
本歌の事といへり
委の歌の事といへり
桑の歌の事といへり
條の歌の事といへり

是ハ中の七文字のと文字あまり一文字ありて、はての七文字の句のなき也。これもひとつのすがたなり。かやうにもよむべき也。

一折句の歌と云ものあり。五文字あるもの、名を五句の上にする。てよめる也。小野小町が人に琴をかりにやるとてよめる歌。

ここの葉もどきはあるをわたのまかん
まつ見よかしへての散るやど

かへし

ここの葉のどこなつかし。みはあせると

なべての人にあらすなよゆめ

是ハ琴給へど云五文字を句の上におきたる也。返事ハ琴のなしと同じ句の上におきてかへしたる也。

仁和の帝ハ光孝
 天皇ハ申セ思
 上テカハ思
 又ハ廣幡御
 所ハ中納言廣
 卿ハ女計子廣
 榮花物帝月宴
 卷村上帝の廣
 の記せる條に
 御息所そあ
 やしう心こさ
 心はせあるま
 に帝はほしめ
 たりける内よ
 かく往來の關
 果ハ尋ねてさ
 ぬすむればさ
 こきなば歌を
 じやいふ歌を
 給ひ方々々に
 方々給ひける
 申させ給ひけ
 よ御息所ハ諸
 なそまぬら給
 ひたりける心
 見ゆれさ思こ
 召けるいさ思

それの御方さし
 いの御方さし
 いかし給ひま
 関しあらまほ
 うそ思されほ
 云々さあり

よき一本よ
 るさあり

一沓冠の折句の歌と云ものあり。

あふさかもはての往來のせきもぬす
 たづねてとひこきあかへさし

是ハ仁和の御門のかたしにたてまつり給ひけるにみあ
 心もえす御返事をもをたてまつらせ給ひたりけるに廣幡
 の御息所と申しける御方よりたき物をまるらせられけれ
 ばこゝろある御事におぼしめされけるとぞ申しつたへ侍
 りし。

一をみあへしはあすさきといへる事をすゑてよめる
 を野のはさみし秋に似すありそ増す
 へしだにあやなまゑるし景色の

これハ下の花薄のさかさまによみたり初句の一字とばて
 の七字との一字をよみたり。

一又初の一字と終の一字を沓冠に讀む事ありそれまたの
 歌のやすけれどもらゆるれるの五字の大事あり俳諧より
 外ハよまれぬ物也其證歌によめる

らちの内に競ふる駒の勝負の乗れる男の鞭の打から
 りんだうの花を手向るさ法師の經讀聲の尊かりけり
 るりの色に咲る朝顔露置てはかあき程を思ひ知る
 れれの又空頼めする人故に心つくして待れこそすれ
 るるかいたて湊も知らぬ夕闇に船漕出す夜半の月まろ
 是もさせる事もなければも沓冠まゑるすついでよ注すこの
 跡のよりほかによきまじき物ありたの沓冠のやすく
 よきも侍れども此沓冠のらりるれる大事におほゆおほく
 のよまれぬ也
 一廻文歌の頭よりも下よりも同じやうによまる也是ハ

小論尼か歌也。

むらくさにくさのなつもしそあつらはあそしもとあ
のさくにさくらむ

をしめどもついにいつもとゆくはるのくゆどもついに
にいつもとめしを

是の沓冠ともいふべし。此歌の脉大事也。よむ人もあれども
はかしくまきもあし。朝夕に詠べき事にあらず。口傳にあり。
いろはに曰、

いはいろくろはらはにまにほくほへをへと
かどちまぢりありぬかぬるどるをまをわれ
わかすかよるよたつたれわれそまそつきつ
ねかねなつならくらむかむうかうぬくるの
ちのおくおくとくやとやまやまけふけふた

ついに假字たが
へれどかいる歌
にひままでい
すくまむへら
す

いしく題物名と
いへり

ふこみこえたえてうてあのおさささきまき
ゆるゆめすめみかみまるまゑてゑひるひも
のもせこせすくす

是体也。是秘が中の秘事也。可秘々々。かくし題といひねといふべき事をばうへにあらとさでま
たによみかくすなり。

いちりきをかくしたる歌に、
をど年もこども變らで咲花を其ひちりきと知人をあき
わらふねのみやしるをかくしたる歌、

一重句といふ事あり。
茎も葉も皆縁ありふか芹のあらふねのみやまろく見ゆらん

一誹諧
心こそ心をとかるこゝろなれ心のあたへ心ありけり

誹諧の心詞のな
かしきをいへり

やうくなりは
さまじくの様
あるな

いたくの事のは
格別のなかしき
ふしなさいふ意
あるへし
せほうの説法ふ
り

秋の野になまめきたてる女郎花あきことくし花も一時
 一贈答これの歌を返すを云なり。きはめて大事なり。人のやす
 く思ひてをかしげに返すなり。見苦るしき事也。返すもやう
 くあり。たとへばたゞ人の返事をするも、事に事かとい
 へる返事にも、なに事もいえずなともいふ。又別の事もあら
 ずあきと云に、その詞をくして返す事もあり。心の同じ事あれ
 ども、詞をかへてかへすもあるあり。歌のよくよめどもかへ
 しのいたくの事のなきもあるなり。
 一 小町がもとへ素性法師がせほうをきく、阿倍の清行が
 づつめども袖にたまらぬ白玉の人をみぬめの涙也けり
 かへし小町
 一 業平が家よ侍りける女に敏行、おろかある涙ぞ袖に玉のあす我のせきあへず瀧つ瀬なれば

禁中の皇居仙洞
の御所を申す

徒然のながりにまざる涙河袖のみ濡て逢よしもあし
 といへりければかへし業平女にかたりて、
 浅みてそ袖のひづらめ涙河身さへ流ると聞かば頼ん
 一大貳三位里に出で侍りけるをさかせたまひて後冷泉院御
 歌に、
 まつ人の心ゆくともす住吉の里にどのみん思さざらん
 どありければ大貳御かへし、
 住吉のまつとも更に思はえで君が千歳の蔭を戀もさ
 かやうのたぐひおほけれどかへしするやうの本にありぬ
 べきのこれらなり。この外にあれども事多ければ記さず。人
 のもとへやる歌もよく心得て讀むべし。禁中仙洞すべ
 て貴所へ参らす歌をわたくしに君かなどのよまぬなり
 上の御事を君かきと申すは、かりあしよそへの人を君か。

厭ひあへまらん
時忙しくて歌
を案すへき暇な
き時也

あどぬいとぬかり。君といひつればやがて上の御事也。便な
き由の故あり。是等の今の教訓あり。
一 鸚鵡かへしといふものあり。本歌の心詞をバかへずして同
じ事をいへるあり。鸚鵡といふ鳥の人の口まねをする故に
かく名付たり。いそがしく思ひあへざらん時の儀ごとのに
さもまづべし。一字をもてかへす事侍り。神妙の事にあら
ず。むかし今もおほけれども、事おほければさのみとてま
さず。集に入たる事。たとへば是ぞ鸚鵡かへしといふべき。
後一條院春日行幸に、上東門院へ、

その上や祈りおきけん春日野の同じ道に尋ね行哉
御かへし、上東門院、

くもりあき世の光はや春日野の同じ道にも尋ね行らん
かやうにかとらぬを云あり。詞のこれはどについかねども

同心同詞なるの多かるあり。三句さあがらにてかとらす。二
句又常の事あり。さきにまると所のやうにすこしかとりて
詞をかへたるやうあり。

あだかりと名にこそたてれ櫻花年に稀ある人も待けり
といへり。かへしにのあだなりともあたらすとはいひ。又
まれなるよしをもいふべきに、それを何ともいはで、業平
のかへし、

今日来すの明日の雪とを降あまし消すの有とも花と見ましや
是の一の様あり。是あらずかとりたる事あれども、是等を心
得てたがぬべし。業平の殊にかへしを能くまけるあり。

一 古歌をとる事、第一の大事也。上手の見ゆる事なり。まかあれ
どもいと上手からぬ人も、古歌よくとる人もあり。上手の中
にもふるき歌えとらぬ人もあり。此中又二の様あり。一にの

詞をとりて心を換へ、二にの心をかへて心ながらとりて、詞をかへたるもあり。詞をとりて風情をかへたるのよし、風情をとる事のつとも見ぐるし。心をとりて物をかふと云ひ、古今の歌に、

月夜よし夜よしと人に告やらばこてふに似たり待すしもあらずとよめるの、万葉に、
我宿の梅咲たりと告やらばこてふに似たり散ぬともよしといへるをとれり。是の心も詞もかへずして、梅を月にかへたるばかりあり。かへるたぐひの是に限らず。詞を取りて心をかへたるの又おなじ。万葉集の歌あををば、本歌取やうとしもあらず、少しかへせよめるも多し。

又人言の夏野の草の茂くとも妹と我と似たつととりあはとよめるをととりて、詞の夏野の草のまげくとよめる、又

三輪山をよりあ
りてゆくまて一
首の歌の如く今
本の歌のきなせ
ハ誤り今寛文
本につづけたる
に從ふた同本
にのく水の山上
みよし野の山に
ありすみての二
句

足引の山橋の色にいで、我戀ひなんをやめん方なしといふを山たら花の色にいづあど取れり。めかりあはやさいとまなみ黄楊の小櫛もとりてたみ見すといへるを、あたの鹽焼さいとまみと取り取り、又、
須磨の鰯の鹽焼衣梭を荒み間遠にしあれば未着あれず是をまはやくあまのふち衣と、さながらち歌をとるとしもあくとれり。又まづくに濁る山の井のといへるぞ、人丸が、
結ぶ手の岩間を狭み奥山の岩陰清水あかすも有かあといふをとれる。又三輪山をまかまかすか、ゆく水のかすかく、水無瀬河わりてゆく水、又言にいて、いはぬなといへる人丸の也。万葉のふるき詞をとれり。古歌に衣だに中にありしといへるを、後撰の歌につらからぬ中にあるこそうしといへあどとれり。このたぐひかす知らず。上古にのかくの

さりたる斗を詮にさひさりたる古歌の方のみむれさありてさの意也

この春一本に此松さありいつるの上寛文本に谷よりの三字あり

おれんハ自然の字音あり

上手のけぢめ云々ハ上の常の人なりさひて上手を見せんさてこいふ也
思われのれ文宇并する心世の心の字寛文本よなき方まさりわへし
事かけさらんにハハ大方古歌の詞をさらすしてハハ事のたらん限ハハ也

大事あり寛文本に大事のさあるに従ふへし

ととし中頃の歌とる事まれあり。ちかき世にも又同じ。ちかくの經信卿
すみ吉の松を秋風ふくからに聲うちそふる沖つ白浪
といふをとりて

沖つ風ふきにけらしき住吉の松のまづえを洗ふ白浪と取れり。かくの如くとれるを上手とい申すあり。わざとめかくし耳にたつて是をとりたるばかりを詮にてわが心も詞もあきかへすくも此道の魔也。尤外道也。或秘抄云。現大身満虚空。現小身入芥子といへり。證歌云。

我宿の物なりあがら櫻花散をばえこそ止めざりけれ東三條左大臣の折りてかさゝん老かぐるやといへる。躬恒が老もかくれぬこの春のどよめるすてしちかき世のためしにひかるゝ也。いづるこゑなくバといへるをさながらと

れり。されども是の歌をとる作法にのあらず。まねんにかよへるか。凡古歌とる事の歌にまめある人の所爲あり。二つの事あれどもわれと珍しくよみたらんに劣るべくや。すべて末の世の人。今の歌の風情詞もよみつくしてさのみあたらしくよき事の有がたけれバ歌跡を知りてたゞまわくどある歌のよろづの人にかとりたる所もなき事を。上手のけぢめあらんとておそろしげなる万葉の詞古歌とりなし。て前をはらふのかならず我心によぐよめりとの思されぬ。ども少しけぢめあらんとてする心あり。二句をとりてねの事三句とる事のまかるべからず。おほかた事かけざらん。に古歌の詞いたく多く取る事をバ先達の難とする事あり。よくくはからふべしとなり。

一歌に大事ありてにをいといふ事あり。ちかくも清輔朝臣ら

ら吹風に霧はれて八十嶋かけてといへる歌をば、て文字の
 さしあうてわれどもあしくも聞えせ。此たぐひの雲霞の如
 くおほく侍り。我身も草におかぬばかりぞといふにや。是の
 てにをはのやうを知らざるあり。五音と云もの、通ひぬれ
 ば、いづれもわたりて苦しからずといへども、やうによるへ
 し、あしからんし見苦しかるべし。唯歌よみあらぬの、か
 の如きの事にて、みゆるあり。同文字の一ふし一文字にて、よ
 くもあしくも聞ゆるあり。あしさまに文字のうつりて、耳は
 たのにおほし。月やせれとてやの袖のなごいへる文字の、
 き侍り。すべて一物の名を、三回にひきとりて續くる事、上
 手のふつとせぬ事あり。一ふし一ふしに、
 一殊に禁忌をさるべし。歌合にあらすの少々の難いどがなら
 ず。よく思惟すべし。

まかの如きいふ
 くの如きいふ
 に同じし
 しらの失の字音
 なるへしあやま
 ちの意あり

歌合寛文本に花
 合あり

根合の昔浦の根
 を置すれは其長
 きをたのむはす
 なしていへり

ふさたの無沙汰
 には及ばずのさ
 たに及ばずのさ
 め由也寛文本に

君の御運の歌の禁忌にのよるべきにあらず。但まかの如き
 の事の恠異あり。中々又上手の中にまぢりあるあり。忠峯が
 禁忌にてよみて、躬恒に難せらるゝ歌。
 白雲のおりゐる山と見えつるの、高嶺に花や散迷ふらん
 とよみて侍り。よき事にあらず。又堀河院の御時、長忠が題参
 らせける出題に、夢後郭公と云事を出したりける。いまりし
 き事なり。同院の中宮の歌合に、仲實歌に玉のみとのとよめ
 る、みちまぢりあり。かくの如きの事むかし今おかし。又賢子の
 さふらひ所に、孝言が出題に、月暫隠といふ事もあるあり。昔
 原の内侍が根合に、わがまたまえの烟あるらんとよめぬも
 あり。是皆憚あり。又思へば戀の歌には、いからず。たよしね
 んの事あり。又かゝる事もよきたなる事も侍り。弘徽殿女御
 の歌合に、永成法師が歌に

三宇寛文
に本あり

生死の海也
ふなはしめ已下
の注皆寛文本に
本文とせり

もとのこれをいましむべし。
 一いはしろの松の事のおこり憚あり禁中にて不可詠まつ
 の憚あけれどもむすぶが憚あるあるべし。
 うつせみの世さある泉ふたつの海生死の海也霞のたにあしす
 だれ津津の國より外可詠也。外外あらくのそこをいしきみ納涼に思ふ
 るき袂ふるき枕むなしき床時うしなへるいまはのうら
 ぬにすいそいなかに不憚。あがれての世はちどりたれこめ
 てむなし煙煙昇あどたゆる雪是つれいさのをたまささる
 うとむしろ雲がくれ日月いすぎにし君これらのみあつ
 しむ事なり但例あり仲平云いせに寛平の御宇すぎにしと
 いへりそのむかしの御功人のよし也。

一夜のみじかさといふ事先例これを難す但事に従ふべきあり。但よはのあどありての苦しからずいかでかよまざらん

除咎の深咎の誤
あるへし

みじかさよあどいつくべからず承暦歌合に藻盤のけふ
 り絶えやまぬらんと侍るを經信禁之非除咎也歎やうによ
 るべし。かやうの事又詞よく心得てよむべきあり。
 一わが述懐とあらばよみ得たる歌なり又戀あを事によりた
 不憚事もありけれどいかにぞやある事もあるあり。

一堀河院の中宮に花契週年といふ題にて上御製に、去年まで
 をりて見るべき櫻花とをりての詞があしきあり朝光がを
 りにかいとよめるのいみにあらず禁中あをにてをるとい
 ふ事これれをいましむ清輔朝臣例を引ける拾遺の歌を
 でをりて見るかひもあるかあ梅のはなど源の廣信の朝臣
 の歌これ康保三年の事ありもつともいむべし。下折別
 のことかれどもうちさゝたる同じ事ありされば折もいむ
 べき歎。

なりにかひ寛文
本になりにこと
あり

あらしは一本に
あらつしとあり

不及名所にさへ
寛文本に不及古
世かになあり

文字を聲によむ
ハ字音のまゝに
歌によみいる事
を云ふ

一抑うつぶしぞめつるばみ、まひまは、あらはしすみぞめ、こけ
色あを云ひ、みち出家の物、又時にとりての讀むべからんに
の不及名所にどなくの讀むまじきあり。かやうの事おはけ
れば、思ひ出すに、隨ひて所注也。是になすらへて可計。公宴に
の、我宿どのよまぬあり。但天徳の歌合に、朝忠がわがやどの
梅がえになくとよめり。自撰なれば道理あれど、無沙汰にて
持とす。承暦の後番に、朝長我宿の花に、こつたふとよめり。か
れのさせる歌人ならねども、えらびに入れらる。又文字を聲
によむこといあべてなし。物の名の聲によむ事もあり。

一歌合ならぬに、題をみなつくす事、あちがちにあり。屏風
の如くの歌の題の文字おはけれども、よき程にはからひて
よむべきあり。あまりに心をつけんと思れば、歌姿わるきを
り。又さればとてつやく類を忘れてよめるも、無正体見ぐ

るし。かくの如くの事の歌の大事也。經信卿の翫池土月とい
ふに、岩間の水とよみて池に用ひ、俊頼の雨後野草にあさぢ
ふぞとよみて野草に用ふるなり。松あといひつれば、たゞ汀
あどよめり。如此事あけて敷ふべからず。野亭のすゞのまの
やといひつればあり。山家を軒の杉あどよめるのその陰
を思ひやるあり。あちがちに題をよみ入れんといせず。是を
聞きて、歌いども心得ぬ人の落題の一定ありぬべきなり。よ
くく思ひわくべし。又其所を置きて、他物をよむの難きなり。
たどへば藤を雲あどばかり讀むを申すといへり。

一歌を眼、耳、鼻、舌、身、意にあて、よみ侍る事あり。
眼 櫻花さきにけらしな足引の山のかひより見ゆる白雲
耳 竹近く夜床寝のせし鶯のさく聲さげの朝いせられず
鼻 どのもりの伴のみやつこ心あらば此春斗朝清めすあ

せられず寛文本
にせられぬとあ

やみぬへし寛文
本にありなまし
とあり

黒木の皮もいふ
すけつらぬ木を
大嘗會の天皇の
御一代に一度あ
る大禮よせきす
きさて二國を占
ひて此事なまか
るはする也
きたの云々一
本に小野別場所
にさあり

舌ありとてぬ命まつ間の程斗うき事繁く歎かずもが身
身 佗ぬれば身を浮草の根を絶て誘ふ水わらばいぢんとぞ思ふ
意 無名ぞと人にい言て止ぬべし心のはいかに答へん
是の六儀にあてゝゑるすあり。大方ばかり注すあり。
一和歌の我朝の風俗なれば御門ささいの宮を初めたてまつ
り、いやしき賤の男賤の女にいたるまでも心あるの誰かも
る、事あらんや、まかれば天智天皇世につゝみ給ふ事あり
て、筑前國上毛郡朝倉といふ所の山中に、黒木の丸屋を造り
ておとします。是を木の丸殿といふ。丸木にて作る故あり。
大嘗會の時くる木屋とて、きたの育場所を造りかの時の例
也。民を勞かさず。宮造も儉約なるべきといふよしあり。唐堯
の宮よ土の橋を用ひ、葦の軒をさらざりける例なり。さてか
の木丸殿にの用心をま給ひければ、入來る人のかみら名

のりをまけり。扱この歌をあんよませ行ひける。

それか寛文本に
其後とあり

朝倉や木丸殿に我をれば名乗をしつゝ行ひ誰が子ぞ
天智天皇の御歌也。これを民ども聞とめて、謠ひそめたりけ
るあり。それを國々の風俗ども撰びさだめられける時、延喜
帝の神樂の歌どもくとへられけるに、謠ひそへられけるあり。
り。その馴もその御時くはへられけるとぞ。あさくらにとり
てのめでたき秘曲あり。大かたの歌の道あらず。賢王のため
たき御世に、諸の道を捨て給ふべからず。ある人云、本文に
人の君とされるもの、つたなき物ありとも嫌ふべからず。
文日山にちひさき土塊をゆづらす。このゆゑに高き事をな
す。海のはそきながれをいととす。このゆゑに深き事をなす
といへり。又明王の人を捨て給ふ如く、くるまをつくるに
喰ふ。出れるをもみじかきをも用ふる心あり。また人々喰ひ

くるま寛文本に
たまたまあり

物を嫌ふ事あれば、その身かならず瘦すともあり。かたく大人にいやしきをさらふべからずと見えたり。誠にいとほしければとて、あやまりて賞をもすべからずにくければとて、みたりがしく刑をも加へずして、偏くひとしき惠を施すべしとなるべし。

一又人に一度の咎あればとて、重き罪を行ふ事よくおもんばかりあるべし。麒麟といふかしこき獸物も、おのづから一蹄蹄歟のあやまり赤きにあらず。人とてもいかでか其ことわりをはなれん。然れば文にいへるが如く、過をゆるして賢才を見るべしとなり。其咎あまた度に及ん、なだむるにちからあかるべし。但君をはかりて身の用をかまへ、かたへをわざむきてその祿をのぞむ族をば、ふかくまひどくべし。其故の倭人朝にある時の忠正の物す、ますとも、譏諷のはなは

一 躑躅文本に一
二字なし

寛文本にの字
の上に作り過の
字ハ罪に作り
あだむるにの五
字寛文本にふし

さきにも寛文本
にさきも寛文
にさきも寛文
はくむ鳥の羽
つらむを合み
こいむをいひ
しむ意にいへり
思ひついで侍り
寛文本に思ひ侍
るよまかせて書
けり後見のあさ
けりあすへから
りすあり
越度のあやまち
の意也
その朝に寛文本
よ其つうにさあ
るに従ふへし

だしき、孔墨のさきにもまぬかれがたしなど聞ゆれば、不忠の輩のさらに情のかぎりにあらず。たゞふかくならん事の咎をゆるし、能き輩をも憐みはぐむへしとあり。是の歌の才覺にもあらず侍れども、思ひついで侍り。

一大かた何事よも名を得たる人のたどひ一度の越度あれば、人の思ひゆるすあるべし。その朝に歌もよくよみ侍るを、名をとりぬれば、あやまりのある歌をも、やうぞあるらんとて、其人より下になりぬれば、難を加へぬあり。心操もをさまり、才幹もわりて、よき人なりといひ初られぬれば、少々の失われども、世にも人にもかからず思ひ許さるゝあり。大節身にある時の、少禍ありといへども、不孝とせせといへるが如し。詩歌のたどへにて是を申すべし。

楚思渺茫雲氷冷商聲清脆管絃秋

頌聲寛文本に組
聲は作れり

此詩の頌聲さしくしと難する人ありけれども、秀句あり
とて、四條大納言公任の朗詠の集に撰び入られたり。又長元
八年三十講の歌合に、

又その云々寛文
本に一そのふる
まひ云々なるへ
し貞子皇后ハこ
つづけたり

逢までとせめて命の惜ければ戀こそ人の命ありけれ
けれの詞二つあれども、さたもあくて勝にけり。同じ詞の病
あれども、歌がらよくなりぬれば、聞きとめざるにや。人のあ
りさまもこれらにて心得つべしとあり。又其ふるまひ心ば
へ優なるべし。
貞子皇后ハ一條院の後なり、中關白道隆の御娘あり、彼后御
あやみ重くならせ給ひにける頃、

よと共に契りし事を忘れずの戀ん涙の色ぞゆかしき
とかきて、御几帳の紐にむすびつけさせ給ひけるを、失せ給
ひてのち、院御覽とつけたりけり。御心の中さこそ忍びがた

くおぼえさせ給ひけめと覺ゆるぞかし

めたる馬道にて
禁中の通路なり
うへより后宮の
殿上よりあり
さりけなくその
様子もなくの意
あり
御つほ御部屋ふ
り
多きかふふし
俗よエライな
いはんか如し
うちあひめ打
誦したる句を
はなやかに俗
にハツキリとい
ふ意なり
ひさりこちハ獨
言也
ならん一本に
句まされあり
れ打出人本意
へし

一ある殿上人みあ月の廿日あまりの比いと暗かりけるに、や
んぞとなき后宮にまゐりて、めだうにたゝすみけるに、うへ
より人の音のあまだしければ、さりげなくひき隠れてのぞ
きけるに、御つばの遣水にはたるのおほくすたくを見て、さ
きにたちたる女房ゆゝくしのはたるや、あつめたらんやう
にこそ見ゆれとてすぐるに、次なる人優あるこそにて、螢火
乱飛とうちながめたるに、又つゞきて夕殿螢飛と口すさむ。
下にたちたる人かくれぬ物の夏虫のどはれやかにひとり
をちたりける、とりくきにやさしくおもしろくて、このをど
こ何といふ一ふしならん本意なくて、ねすあきをまいたし
たりければ、さきに立ちたる女房ものおそろし。螢も聲のあ
りけるよとて、つやくさわぎたる、そらおぼめきのはども

れすき口笛を
いふ
そらほめき
ほりも人あり
まじりならそ
こほけするな
ふ
のほし一本に
つれもしあり
みさをにいつ
めて正しくさ
ふ意あり
梨壺ハ禁中五
のへにて昭陽
舎
をいふ

あまりに色ふかくかなしくおぼえけるに、今一人の、ちく虫よりちく虫ひしにとどりおしたるりける、これ又思ひ入れたるはと、たへがたくおくゆかしきさまあり、すべてこの人ともどり、いどやさしくぞありける。この心の、音もせでみさをに燃ゆる燈こそ鳴虫よりも哀也けれといふ心あり。此五人の女房の、天曆の御時、梨壺の五人の歌仙の中に、清原元輔のむすめに、清少納言といふものあり。一人のその頃源氏物語つくれる紫式部ならびに赤染右衛門伊勢大輔、泉式部、馬内侍ちと聞ゆる人々あり、いとどりに心ある様、やさしくこそ侍れ。同じ院の御時、雪いとおもしろくふりたりけるを、はし近く出させ給ひて、雪御覽とけるに、香爐峰の有様いかならんとおぼせ出されければ、かの清少納言御前にさぶらひけるが、申す事もなく、御簾を捲き

上げたりける、今の世までもいみじきたとへにいひ傳へられ侍り。香爐峰の事、唐白樂天、老の後この山のふもとに一つの草室を占て住みける時の詩に、遺愛寺の鐘の枕を敲て聴く、香爐峰の雪の簾をかゝげてみるとあるを、みかお仰せ出させ給ふによりて、御簾をばあげたるなり。やさしかりける事なり。此人々のか様の事のみにあらず。ふるまひいみじき事ども多かりけり。

一野宮の歌合の判者の源順なり。女房をあまたかたせたりとて、男方より、

霜枯の翁草とい名のれども、女郎花に猶なびさけり
とちんいひたりける。これハ花色蒸粟の如し。俗呼て女郎と
そ。名を聞きて、戯欲契階老、恐惡衰翁首似霜と。順が書けるに
よりてかくよめるにや。いと面白し。同じ難なれども、やさし

きつかわ一本
よきいづれに
ありつれに
もあるへし

まふも高くい
分の貴きを云
世にも應せられ
たるハ世の中に
用ひらるを云

れこつきのわき
かつしわきの
誤にや

くればゆかし。あはを蒸せる事ハ聞きつかぬやうなるに、魏文帝與鍾大理尹詞曰、美玉如截肪、黑鬻能漆、擬赤雞冠、黃伴蒸粟とあるを見るにこそ、さる事ありけれどおぼえて、いどいみじけれ。すべて歌の判者の、其才學のさる事にて、まなもたかく世にも應せられたる人すべきとぞ、師匠ありし人の申されしあり。俊頼の十徳なからん人、判者にあたはずとぞ申されける。かゝればにや、源中納言國信の家の歌合を、俊頼の判者たりしを、人々多くおこつき、さまゝの事もかきつけたり。かやうの事に懲りたりけるにや、これらハ世の覺え少く、人にも用ひられぬが致すあり。十徳とのかれら以下の事ハ、能々歌をよみても、判をしても用意のあるべきあり。一大中臣能宣が父頼基にかたりていふ、すぎぬるころ入道式部卿親王の御子日に、よろしき歌つかうまつりて候ふと申す。頼基云、いかに侍りけるぞと。

す。頼基云、いかに侍りけるぞと。

思はざる外にハ
存外にの意也
白りてハ許され
て也一本にハ
るされてとあり
まやわれ宮寛文
本にまやわい
宮さありまや
あさけりいふ
にてあの若き宮
の意也
人々二字寛文本
になし

千年迄限れる松も今日よりの君に引れて萬代やへん世にもよしと申すなり。といふ、頼基まばらく詠じて、かたさるある枕を取りて、能宣を打ちて云く、思はざる外に昇殿をゆりて、主上の御子日あらば、いかなる歌をもてよむべきそや。わさのひのふかき人か。これはどの歌を、まやわれ宮の子日によむやうやあるとてはらだちける。能宣逃げて、げにもまことにこれまで用意あるべき事ともおぼえず。さても打つはどの事ハあまりにやあらん。又其座よてよき歌おれバとて、わがみの歌をほむるハ、びろうある事あるべし。褒美のかひある事もあるなり。

人々遍昭寺にて月見侍りけるに、山家秋月といふ事をよみけるその中に、範永朝臣が其夜しも殿上の番にてまからざ

きつつかの一本
よきいづれに
もあるへし

まふも高くは身
分の貴きを云
世にも應せられ
たるは世の中に
用ひらるを云

わづらひのわき
つたしはこきの
誤にや

くればゆかし。あはを蒸せる事の聞きつかぬやうなるに、魏文帝與鍾大理尹詞曰、美玉如截肪、黑譬能漆、擬赤雞冠、黃伴蒸粟とあるを見るにこそ、さる事ありけれどおぼえて、いどいみじけれ。すべて歌の判者の、其才學のさる事にて、まなもたかく世にも應せられたる人すべきとぞ、師匠ありし人の申されしあり。俊頼の十徳なからん人、判者にわたらずとぞ申されける。かゝればにや、源中納言國信の家の歌合を、俊頼の判者たりしを、人々多くおこつき、さまざまの事もかきつけたり。かやらの事に懲りたりけるにや、これらに世の覺え少く、人にも用ひられぬが致すあり。十徳といわれ以下、以下の事、能を歌をよみても、判をしても用意のあるべきあり。一大中臣能宣が父頼基にかたりていふ、すぎぬるころ入道式部卿親王の御子日に、よろしき歌のかうまつりて候ふと申す。頼基云、いかに侍りけるぞと。

思ひさる外に
存外にの意也
ゆりては許され
て也一本にあり
るされてあり

まやわれ宮寛文
本にまやわかし
宮とありまやわ
あさけりいふ詞
にてあの若き宮
の意也

人々二字寛文本
になし

千年迄限れる松も今日よりの君に引れて萬代やへん世にもよしと申すなり。といふ、頼基まばらく詠じて、かたさるある枕を取りて、能宣を打ちて云く、思ひさる外に昇殿をゆりて、主上の御子日あらば、いかなる歌をもてよむべきをや。わさのひのふかき人か。これはどの歌を、まやわれ宮の子日によむやうやあるとてはらだちける。能宣逃げて、げにもまことにこれまで用意あるべき事ともおぼえず。さても打つほどの事のあまりにやあらん。又其座よてよき歌おれ、ばとて、わがみの歌をはむるに、びろうある事あるべし。褒美のかひある事もあるなり。人々遍昭寺にて月見侍りけるに、山家秋月といふ事をよみけるその中に、範永朝臣が其夜しも殿上の番にてまからざ

れうの御馬ハ御
召料の御馬を云
山家秋月云々よ
り下寛文水にな

りけるを、主上うらやましく思ふらんどおほせ下されて、れ
うの御馬を給りて乗り、山へ罷りて、山家秋月といふ事をよ
み侍りけり。

とふ人もなき山里の秋の夜の月の光も寂しかりけり
件の懐紙の草案をも、中納言とりて、公任卿の出家してこ
もりぬられたりける、北山の長谷といふ所へ見せにやれり
けれど、範永が歌をふかく感嘆して、草案のはし、範永誰人
哉、和歌得其体と書きつけられたりけるを、範永あまりの感
にたへずして、その草案をこひとりて、錦の袋に入れて、寶物
として、首にかけてもちたりけり。これこそ褒美のかひある
事なれ。かやうの事よく、至れる人のすべきなり。あぢ
かしこく。能々思ひはからふべし。

抑和歌に前後の二句あり。此則定惠の二法、天地二理あり。三

草案のいかに寛
文水にそのいかに
にさわりまた
永誰人哉ハ範永
朝臣作哉さあり

表すは寛文
本に表すれは也
さわり

重の次第をたて、迷の前に三毒三惡趣とあり、悟の前に
の三身三徳となる、四病八病をさらへるの、人間の四苦八苦
をいどふ儀なり。五句をわかち六義をまめすの、五脉六根を
表す。九品十体をあらはすの、九識九尊十男十如を表するゆ
ゑなり。三十一字の如來相好を表す。されば、

津の國のなにの事も押あべて葦の緑の御法とぞさく
津の國のなにの事か法あらぬ遊び戯れ迄とこそさけ

此歌を見れば、佛も歌をよみ給ひ、神も納受え給ふことわり
なりけり。まかあれは歌道はかなき戯なりと思ふとも、ふか
く此ことわりを思ひつけ給ひて、一首二首詠じ行ふとも、
三十一尊の佛たち、三十一字の文々句々をつかさとりて、法
性隨縁の月。無明の雲におほわれんをもあきらかに照し、三
諦即是の花嬌慢の嵐にちりまがふ事を觀じつゝ、今生百年

和歌の浦云々
たさいふまで今
木脱して傍に小
字にせり今寛文
本より従ひて本文
とす

全の下不の字一
水あり
潜一本に深に作
れり

の間には、和歌の浦の玉をもてあそび、光を放さん事、うた
がひ不可有となん。

右秘書者、愚老以一身之才所注置也、上古歌仙、髓惱口傳、雖如雲霞、徒畫詞畫心、更無究要之撰、故爲末代嬰兒、注此一卷、大綱淺源、不可出之、夫和歌者、全依教訓、已心讀之、然而不存此趣者、有諸病之科、爲除其科撰之者也、潜、粹心底、不可及他見、穴賢々々、

大宮右大臣俊家息

左衛門佐基俊在判

梁朝の定家卿を
いふ此時中將ふ
れいはいへり

師匠より相傳の秘書一卷ゆづりたてまつりし。御心得のためにてし。これハ羽林よりほかハ、人に名をだにきかせず、ふかく函の底にかくして、ひろふあるまじくし。あなかしこく。

五條三品

釋 阿在判

とし比あさからき此道に心ざしの候はれける時に、いまだ家の人にも名をだにきかせ老候ひしを、ゆるし奉りし。子一人よりほかハゆるさるまじく候也。歌の秘事おほしと申せども、是ほどにふかきあさき心得やすき物候とすし。住吉玉津島の御利生とかばし給ひてよ。あさかしこく。ひろふなくひし思とれり。

俊成卿女としへの局御前

藤原氏 在判

れほし給てよ寛
文本に思はせ給
てさあり又ひろ
ふふくハ露なほ
まりなくさあり
またとしへの局
あり

奉る奉り候と寛
文木にあり
思ひ出しての
また寛文に後
の道とふらひ
きてあらんほ
ひ便宜のさふ
よし申されよ
に云々さつい
たり

此秘書の子より外にゆるすまじき秘事に存しゆを、一子もな
きゆゑに、貴殿を子としてゆづり奉る。是を御覽せんたひ毎に、
思ひ出して後の世とふらひいきてわらんはせの便宜のどふ
らひも有べきのよしゆされよ。げまわされどかやのこりあ
ゆづりたてまつる所也。あなかしこく。

妙

阿在判

書を相傳せんとて起請文をかき侍り。左右あくかきうつさせ
ゆるす事いひまじくは。無心の人書うつすべからず。えかるあ
ひだかやうに書とゞむる物あり。あなかしこく。

爲

氏在判

起請文の事

しもし誤れるよ
やこさなまら
へし

元者秘抄、非實子者不可相承、但道をおもくせむし千願万願の
珠の如くにして、深くせん事一入再入の紅よりもはあはだし

く器量たぐみにして、一字に万字をてらす人わらひ可傳之。此
道を絶ざらしめんがためあり。次に家をまもり言葉をぐして、
千金をになひて須達長者如來をうやまひ、半偈をもどめんた
めに、雲山童子の、全身を捨しが如くあらん人になつたふべし。
若其外の人に傳之者、住吉、玉津嶋、人丸、赤人、殊に下照姫、素盞鳥
尊の悪を蒙りて、今生にの長く求る所の六義にまよひ、後生に
の必厭ふ所の三途に落ちゆはん。仍起請文の狀如件。

正安元年二月十七日

前大納言爲世在判

悦目抄終

佐々木弘綱
校
佐々木信綱

學名抄

東京博文館藏版

無名抄目録上

佐々木弘綱
同 信綱 校

つゞけがら善悪ある事

隔海路論文の事

我與人の事

晴歌可見合人事

無名大將の事

仲綱歌慣詞讀む事

頼政歌俊惠撰ぶ事

このもかのもの論の事

せみのを河の事

千載集予一首入を悦ぶ事
 不可立歌仙由之教訓の事
 千鳥鶴の毛衣をきる事
 歌風情似忠胤説法事
 ますはの海の時
 井手の山吹并かはづの時
 關の清水の時
 貫之家の時
 業平家の時
 周防内侍家の時
 あさもがはの明神の時
 關明神の時
 和琴のおこりの時

中將垣内の事
 人丸墓の時
 貫之躬恒勝劣の時
 俊頼歌を傀儡が謠ふ事
 同人歌中に名字をよむ事
 三位入道基俊弟子に成る事
 俊頼基俊挑む事
 腰句終のて文字を難むる事
 琳賢基俊をたばかる事
 基俊僻難する事
 艶書に古歌かく事
 女の歌よみかけたる故實の時
 猿丸大夫墓の時

蘇合云々の標削るへし

歌をいたく云々の標より以下今本下巻に出たり今改めてお入れつ

- 黒主神に祝ふ事
- 喜撰が跡の事
- ゑのは井の事
- 歌半臂句の事
- 蘇合すがたの事
- 上句劣れる秀歌の事
- 歌詞糟糠の事
- 歌をいたくつくるへば必ず劣る事
- 依秀句心かとりする事
- 案じ過して成失事
- 静縁こけ歌よむ事
- 代々戀中秀歌の事
- 歌人不可證得事

- 非歌仙歌を難じたる事
- 思あまる時自然歌よまる事
- 範兼家會優ある事
- 近年會狼藉ある事
- 俊成入道物語の事

無名抄

歌の題の心をよく心得べき也。俊頼の髓腦と云物にぞまゐりし
 て侍るめる。必まはしてよむべき文字、中々まはしてのわろく
 聞ゆる文字あり。よみずるねどおのづからまゐるゝいはゆる曉
 天落花、雲間郭公、海上月、これらの如くの第二の文字かならず
 しもよまず。みかまの題をよむに、具してきこゆる文字なり。
 又幽にて優ある文字あり。これらの教へあらふべき事にあら
 ず。よく心得つれば、其題を見るにあらはなり。題の歌のあきら
 ず心ざしをふかくよむべし。たとへばいはひにのかさりあぐ
 久しき心をいひ、戀にのわりなくあさからぬよしをよみ、若の
 命にかへて花ををしみ、家路をわすれて紅葉をたづねん如く、
 その物に心ざしをふかくよむべきを、古集の歌をものさしも
 見えぬの歌さまのよろしきによりて、其難をゆるせるあり。

具しての意あり
 つれての意あり

會尺の會釋にて
その歌からのよ
きに斟酌して心
深からぬをも入
るいさ也

るくゝの難ある歌、この會尺によりて撰ひ入るゝつねの事あり。されどかれをバ例とすべからず。いかにも歌合をばにおおし程あるにとりて、いますこし題をよかく思へるを、まざる定むるあり。たとへば説法する人の、その佛にむかひて、よく贊嘆するが如し。たゞし題をばかならずもてあすべきぞとて、ふかくよまぬほどの事をバ心すべし。たとへば郭公をば、山野をたづねありきて、さく心をよむ。鶯をば、待つ心をよめども、尋ねて聞くよしをばいともよまず。又鹿のねをば、さくは物心細く、哀なるよしをよめども、待つよしをばいともいはず。かやうの事異なる秀句をば、かからずさるべし。又さくらをば、たづねれど、柳をば、たづねず。初雪をば、待つ心をよみて、時雨霞をば、待たず。花をば、命にかへて惜むなをいへども、紅葉をば、さほどに心をします。これらを心えぬ、故實を

まらぬやうなれば、よくゝ古歌なども思ひときて、歌のほどにまたがひて、はからふべき事なり。

ついでに善悪ある事

歌のたゞおちと詞をば、ついでにけがらひがらよて、よくもあしくも聞ゆるあり。かの友則が歌に、ともまどはせる千せりなくありといへる。優にさくゆを、おちと古今の戀の歌の中に、戀しきにわびてたましひまをひあはともいひ、又身のまをばだにまらねざるらんなどいへる。たゞおちと詞なれども、おびたゞしくさくゆれば、みち續けがらあり。さればふる歌にたしかにまかゝりありなを、證をいだす事やうによるべし。其歌にとりて善悪あるべきゆゑなり。曾根好忠が歌に、

播磨なる飾磨にそむるあながちに人を戀しと思ふころ哉
あながちといふ言葉の、うちまかせての歌に、よむべしともお

うちまかせての
歌の大方普通の

歌にていふまじ
詞さ也

ばえぬ事ぞかし。まかあれど。まかまにそむるどつゝきてわだ
ども艶にやさしくきこゆるなり。古今歌に、

春霞たてるやいづこみよし野の吉野の山に雪のふりつゝ
これのいどめでたき歌也。中にもたてるやいづこといへる詞
すぐれて優あるを。或人の社頭の菊といふ題をよみ侍りしに
神垣にたてるや菊の枝たわみたいたひけたる花の白ゆふ
かなじくたてるやとよみたれど、これのわざども詞もさかぞ
手づゝに侍り。

手ついで不器用
の意にて下手な
るを云

隔海路論文

あるところにて歌合侍りし時海路をへだつる戀といふ題に
歌たりす筑紫ある人の戀しきよしをよめりしに、かたへんこ
れを難す。さらあり筑紫の海をへだてたれば、おもひつゝくる
にのさることあれど、かちよりゆく人のために、門司の關ま

さらありの尤勿
論ありとの意也

さひろの座廣に
てひろひるく
さらへ所なきを
いふふるへし

でおほくの野山をすぎて、たゞいさゝか海をわたるべければ
題の本意もなく、すこぶる荒涼あるかたもあり。たとへばみち
のくにある人を戀ふるよしをよみて、この歌ひとつにて、野
をへだつる戀にも、山をへだつる題にも、もしの里をへだて、河
をへだつるにも、もちひんどやする。題のうたひ、さもとさきこゆ
るこそよけれ。あまりさびるありとあんずあるひにいはいく歌
のさのみこそよめ。まさしく海だにへだてば、かあらず彼の磯
なる人を、この浦にて見わたすべきことか。あまりの難なり
とあらず侍りしを、その座に先達あまた侍りしも、かた
にわかれて、おほきある論にてあん侍りし。されどこゝろにく
きはどの人、おほくの難をいいます。こしいはれたりどぞさだ
め侍りし。

我與人

又おきし所にて、小因幡といひし女房、夏を契るといふ題に、
 惜むべき春をば人に厭はせてうら頼めにや成んとすらん
 とよめりしを、よろしき人くさだめ侍し程に、ある人のい
 なく、春をば人にといへるや、すこしおぼつかあからん。たゞ春
 をば我にといひたらば、たしかにてまさりなんかしといふ。こ
 れに同ずる人おほく侍りしを、俊惠聞きて、無下に心おどりせ
 らるゝ事をものたまふかあ。人にといひたりとて、他人とやの
 おもひたざるべき。我にといひて、歌の事のはかに品あきさ
 こゆるものを、歌の花麗をさきとす。人をばまらず。われのと
 ひ難ありとも、人にとよまんどぞ申し侍りし。

晴歌可見合人事

はれの歌の、かあらず人に見せ合すべきあり。わが心ひとつに
 てのあやまりあるべし。予そのかみ高松の女院の北面に、菊合

といふ事侍りし時戀の歌に、

人まれの涙の川の瀬を早みくづれにけりあ人めつゝみ
 とよめりしを、いまだはれの歌あどよみあれぬほどにて、勝命
 入道に見せ合せ侍りしかば、この歌大きな難あり。みかどさ
 ささのかくれ給ふをば崩すといふ。その文字をばくづるとよ
 むなり。いかでか院中にてよまん歌に、この詞をば据うべきと
 申し侍りしかば、あらぬ歌をいだしてやみにき。其後程なく女
 院かくれはしましにき。この歌いだしたらば、さとしとぞさ
 だせられ侍らまし。

無名大將の事

九條殿いまだ右大臣と申し、時、人々に百首の歌よませ給ふ
 事侍りき。そのたびいみじき人々ひが事よみて、はてよの異名
 さへつぎ給ひにき。近く徳大寺の左大臣の、無明のさげを、名も

さとしその前
 光あといふ意あ
 り

あきさけとよみたまへりしかば名あしの大將といこれ五條の三位入道、この道の長者にいます、されど富士の鳴澤をふじのなるさとよみて、あるさの入道、名あしの大將とつがひて、人にわらとれ給ひしかば、いみじきこの道の遺恨にてあんな侍りし。かのく、これはどの事、知り給はぬに、あらじ。思ひわたり給へりけるにこそ。

仲綱歌慣詞讀む事

おあじたびの百首に、伊豆守仲綱の歌に、ならはしがほあきとよみたりしかば、大貳入道き、て、かやらの詞よまん人を、百千の秀歌よみたりとも、いか、歌よみといはん。無下にうたてき事なりとこそ申されけれ。これら、みあ、人に見せあはせぬあやまりと也。

頼政歌俊惠撰ふ事

建春門院の殿上の歌合に、關路落葉といふ題に、頼政卿歌に、都に、いまだ青葉にて見しかども、みぢちりしく白川の關とよまれて侍りしを、そのたびこの題の歌あまたよみて、當日までおもひわづらひて、俊惠をよびて見せられければ、この歌の能因が、秋風ぞよく白河の關といふ歌に似て侍り。されどこれ、いではえすべき歌也。かの歌あらねど、かくもとりあしてんど、へしげによめるとこそ見えたれ。似たりとて難とすべきさまに、あらずとはからひければ、いま車さしよせて乗られけるとき、貴房のはからひを信じて、さらばこれをいだすべきにこそ。後の答を、かけやすべしといひかけて、出てられにけり。そのたびこの歌、思ひの如くいではえして、かちにければ、かへりて則ちよろこびいひ遣したりけるとぞ。見る所ありて、まか申したりしかど、勝負さかざりしは、どのあぶあきよそ

いでばえい出し
榮のする一き
すぐれたるあき
の意也
へしげは彼能因
の歌をたしへす
ほとのよき歌
也
後の答さハもし
此歌難せられて
人にまけわらひ
るいやうの事を
いふふるへしさ
に、其せめハ俊惠
にかけんさ也

にてむねつふれ侍りしに、いみじき高名したりとなん、心ばかりのおぼえ侍りしとぞ、俊恵かたり侍りし。おまじたび水鳥近馴といふ題に、おまじ人、

子を思ふ鴉の浮巢の揺られきて捨じとすれや水隠れもせぬこの歌めづらしとてかちにき、祐盛法師これを見て、大きに難じていはく、鴉の浮巢のやうをえまらぬにこそ。かの浮巢のゆられわりくべきものにあらま。海の潮のみちひるものおれば、うれをまりて、鴉の巢をくふに、葦の莖を中にこめて、まかも枯穂をまくつろげて、めぐりにくひたれば、潮満てばかみへわがり、沙干ればまたがひてくだるあり。ひとへにゆられありかんに、風ふかばいつくともましくゆられいで、大浪にも碎かれ、人にもとられぬべし。されど其座に知れる人のなかりけるにこそ、勝に定められにければ、いふかひまじとぞ申し侍りし。

くつろげていせ
るやまある意ふ
り

このもかのもの論

二條院和歌このませおはしましける時、岡崎の三位御侍讀にてさぶらはれけるに、この道の聞えたかきによりて、清輔の朝臣召されて、殿上に候ひけり。いみじき面目ありけるを、ある時の御會に、清輔いづれの山とか、このもかのもといふ事をよまれたりければ、三位これを難じていはく、筑波山にこそこのもかのもといふより、大かた山毎にいふべき事にあらすと難せられければ、清輔申していとく、つくは山まで申すべきからず、河赤にもよみ侍るべきにこそとつふやきければ、三位おざわらひて、證歌をたてまつれと申されけるに、清輔のいはく、大井河の會に、躬恒が序かけるとき、大井河のこのもかのもにどかける事、まさしく侍るものをといひいでたりければ、諸人口をどちてやみにけり。荒涼にものをば難すまじき事あり。

つふやきかみ
ふとするな
いふ

蟬の小河の事

光行賀茂社歌合とて去侍りし時、予月の歌に、

わいては老て也
老功によりてさ
の意也

石かどや蟬の小河の清ければ月もながれを尋ねてぞすむ
とよみて侍りしを判者にて師光入道かゝる河やあるとて、ま
けにあり侍りにき。思ふ所ありてよみて侍りしかど、かくあり
にしかば、いふかしくおぼえ侍りしほどに、そのたびの判すべ
て心得ぬ事おほかりとて、又改めて、顯昭法師に判をさせ侍り
し時、この歌のところを判していはく、石河蟬の小河いとも聞
きおよび侍らず。たゞしをかしくつゞけたり。かゝる河さとの
侍るにや、所のものに尋ねてさだむべしとて、事をきらす。後に
顯昭にあひたりしとき、この事かたりいで、これハ鴨河の實
名あり。當社の縁起に侍りと申し、かば、驚きて、かしくぞお
いて難せず侍りける。さりととも顯昭等が聞き及ばぬ名所あら

けこさハ
て常ありふれた
る事をいふ

んやのと思ひて、やゝもせば難じつべくおぼえ侍りしかど、た
れが歌どのまらねど、歌さまのよろしく見えしかば、所おきて
さやうに申して侍りし也。これすあさち老の功ありとなん申
し侍りし。其後この事を聞きて、禰宜祐兼大きに難じ侍りき。か
やうの事をばいみじからんはれの會、もしハ國王大臣の御前
あそにてこそよまめかゝるげごとによみたる、無念ある事あ
りと申し侍りし程に、隆信朝臣この河をよむ。又顯昭法師、左大
將家の百首歌合のときこれをよむ。祐兼いはく、さればこそ我
いみじくよみだしたりと思はれたれど、世の末にいつれ
か先ありけん。人いなかでかまらん。何とあくまぎれてやみぬ
べからんめりと、本意あがり侍りしを、新古今撰はれし時、この
歌入れられたり。いと人もまらぬ事あるを、執り申す人あそ
侍りけるにや。すべてこのたびの集に、十首入りて侍り。これ過

讀口にもあらす
はよみ口よき歌
人の意にて上手
にもあらぬにさ
也

分の面目あるうちよもこの歌の入りに侍るが生死の餘執ともなるばかりうれしく侍るあり。わはれ無益の事どもかき。
千載集に予一首入るを悦ぶ事

千載集に予一首入れり。させる重代にもあらせ。讀口にもあらず。又時にとりて人にゆるされたる好士にもあらず。まかるを一首にても入れるのいみじき面目ありとよるこひ侍りしを、故筑州きゝてこの事たゞなほざりにいとるゝかどかもふ程に、たびくゝになりぬ。誠に思ひてのたまふにこそ。さるにてもこの道にかならず冥加かはすべきなり。そのゆゑの道理のまかあれど、人のまか思ふこと。ありがたきわざあり。この集を見れば、させることあき人々、みち十首、七八首、四五首、いれるたぐひおほかり。かれらを見る時の、いかばかり心やましく思はるらんとおしはかるに、あまさへかく悦ばるゝいみじ

しき事あり。道をたふとふに、まづ心をうるはしくつかふるにあるあり。今の世の人の皆まかあらず。身の程もまらず、心高くおごり、かまびそしき憤を胸にむすびて、事にふれて過おほかり。今思ひ合せられよとあん申し侍りし。誠にこの道の冥加身のほどにも過ぎたり。ふるさ人のいへること、かからずゆるあり。

不可立歌仙之由教訓の事

同じ人常に教へていはく、あかかしこく。歌よみ名たてたまひそ。歌のよく心すべき道なり。われらが如く、あるべき程定りたるもの、いかあるふるまひをすれども、それによりて身のはふるゝ事のあし。そこをどの重代の家に生れて、早く孤子にされり。人こそもちひすども、心ばかりの思ふ所ありて、身をばたてんとほねはるべき也。まかあるを、歌の道其身にたへたる

同じ人の則ち筑
州をいふ
あるべき程定ま
りたる世にあ
りたるたつきの
定まりたる者ハ
さ也
はふるゝの零落
する事也
ほねはるゝ俗に
骨折るこいふ意
かり

人にあらされの
くたやれしく思
る意也
歌の下六字は
す其本を得て見
ふへし
遷度の先途の意
にや
心にくい奥の
かしき意也

きりふくろに云
々此頃のみさわ
さふるへし

やうくしは様
々し世

事されば、こゝかしこの會にかまへて、招請すべし。よろし
き歌よみいでたる面目もあり、道の名譽もいでさぬべし。さ
あれを所々にへつらひありきて、人にあらされたちあは、歌
○○○○、人よ知る、方ありとも、遷度のさとりとのか
らせあるべかめり。そこたちのやうある人、いと人にも知ら
れずして、さしいづる所に、誰をか問る、やうにて、心にく
い思これたるがよきあり、さて何事をも好むは、その道に
すぐれぬれば、きりふくろにたまらずとて、その聞えありて、ま
かるべき所の會にもまじり、雲客月卿の筵の末に臨む事も
有ぬべし。これこそ道のよき遷度にて、われ、こゝかしこの人
非人がたぐひに連りて、人にもまられ、名をあげて、何にか
せん。心におもしろく、ましくおぼゆとも、かあらす所さ
らひして、やうくしと人にいはれんと、思はるべきぞと、かん

教へ侍りし、今思ひあさすれば、いみじき恩を蒙ふれる也。さる
に賢きもの、ならひ、我子なをだに、おぼるけならで、教訓
する事もあかりしを、かやうに後安くいひ教へければ、又異事
にあらず。管絃の道につけて、おと繼ぐべきものとして、人に數ま
へられて、あれかしと思ひけるにこそ、のどかに思へ、いとあ
それにあ光。

千鳥鶴の毛衣をさる事

俊惠法師が家を、歌林苑と名づけて、月ごとに會々侍りしに
祐盛法師その會所にて、寒夜千鳥といふ題に、千鳥もさけり鶴
の毛衣といふ歌をよみたりければ、人々めづらしきといふは
とに、素覺といひし人、たびく、これを詠じて、おもしろく侍り。
たいし寸法やあさ侍らんと、いひたりけるに、とよみになり
て、わらひの、まじりければ、ことさめてやみにけり。いみじき秀

とよみにありて
の大笑にありた
るを云

句おれど、かやうにありぬれば、かひなきものありとせん。祐盛
 かたり侍りし。すべて此歌の心得ず侍るあり。鳥のみを毛を衣
 とする物おれば、程につけて千鳥もみづから毛衣さすや、あ
 るべき。必ずしも寸法事の外あるかり物、あふべきにあらざ。か
 の白妙の鶴の毛衣年ふともといふ古歌あるにこそあれ、い
 づれの鳥にもよまむに憚るべからず。さきに申し侍る建春
 門院の殿上の歌合にも、鶴の毛衣とよめる歌侍り。いさゝか疑
 ふ人ありければ、判者答あるまじきやうにきだめられたり。但
 鶴の毛衣、毛の心にはあらず。別の事あり。鶴ばかりがきたる也
 と申す人も侍れど、いまだその證をえ見及び侍らず。弘才の人
 に尋ぬべし。

歌風情似忠胤説法事

祐盛法師がいほく、妙庄嚴王の二子の神變を見する釋に、大身

せはたかり春は
 ひふる意にて虚
 空もほせはき
 意あり
 所ありは餘裕あ
 る意にて猶ひる
 き意あり

此一段徒然草に
 一事を必ふさん
 の思ふ他の事
 のやふるいをも
 いたむへからす
 云々さいふ次に
 此物語を引用ひ
 たり
 いひしろふ互に
 いひあふ意あり
 わたのへは揺津
 國あるへし
 ほのくはほの
 かある意にて俗

を現すれば、虚空にみち、小身を現すれば、芥子に入るをいふ
 の、世の常の事あるを、かの忠胤の説法に、大身を現すれば、虚空
 にせはだかり、小身を現すれば、芥子のあかに所ありといへり
 けるが、いみじき和歌の風情にて侍るあり。歌のかやうに心得
 て、古事に色をそへつゝ、珍しく取りあすべき也。さのみ新しき
 以後のいかいあり。あへてよまれんとせん語り侍りし。

まそはのすゝき

雨のふりける日、ある人のもとに、思ふとちさし集りて、古き事
 かと語りいでたりけるついでに、まそはの海といふの、いかぢ
 る海ぞなごいひしろふ程に、ある老人のいはく、渡の邊といふ
 所にぞ、此事まりたる聖ありと聞き侍りしかと、はのくとい
 ひいでたりけり。登連法師の中よりありて、此事をさして、詞少
 きになりて、又問ふ事もなく、あるじに鏡笠暫しかしたまへと

にうすく少し
はかりふといふ
に同じし
登進法師の詞花
集にはしめて歌
出で以後十一代
の集に歌の入り
る人あり
思ひ給へしは存
せし意あり
いでハ發語にて
俗にイヤモウ
ヤサふといふ意
あり
何事も静にこ
俗に御綴りさ
にいふ意あり
すき物ハ物すき
ふる意にて其事
に執心深きをい

いひければ怪しと思ひながら取りて出でたりけり。物語をも
さゝさして、養うち着、藁踏さしはきて急きいでけるを、人々あ
やしがりて、其故を問ふ。渡のべにまかるあり。年頃いふかしく
思ひ給へし事を、知れる人あるとき、いかで尋ねにまから
ざらむといふ。驚きあがらざるにても雨やめて出で給へとい
さめけれど、いではかき事をものたまふかき。命の我も人も
雨の晴間など待つ物か。何事も静にとばかりいひ捨て、い
にけり。いみじかりけるすき物なりかし。さて本意のこどく尋
ねあひて、問ひさゝていみじう秘藏しけり。この事第三代の弟
子にて、傳へ習ひて侍るなり。此海同じさまにてあまた侍る也。
ますはの海、まそをの海、まそらの海とて三種侍るあり。ますは
のすゝさといふの、穂長くて一尺ばかりあるをいふ。かのます
かゝみをハ万葉集にハ十寸の鏡とかけるにて心得べし。まそ

眞麻の下古寫本
結の字あり
俊賴朝臣の歌にぞ
ハ堀河百首に出
たる花すきま
そほの糸をく
かかて絶すも
なれも絶すも
さかたも絶す
さいふも絶す
清水遊臣の答問
雜鶴に云無名抄
に三種にわか
きしハハハハハ
まそハハハハハ
てハハハハハハ
かハハハハハハ
まそハハハハハ
いてハハハハハ
曾保ハハハハハ
赤色ハハハハハ
りにハハハハハ
しハハハハハハ
きハハハハハハ
さハハハハハハ
古言ハハハハハ
のたハハハハハ
説ハハハハハハ
るハハハハハハ
信ハハハハハハ

をのすゝさといふの、眞麻の心なり。これハ俊賴朝臣の歌にぞ
よみて侍る。まそをの糸をくりかけてと侍るとよ。糸をの乱
れたるやうなるなり。まそらのすゝさといふの、誠に蘇芳ありとい
ふ心なり。ますはらの海といふべきを、詞を畧したるなり。色深
きすゝさの、長くかえまだれたるあり。古集など、たしかに見
えたる事のあけれど、和歌のあらひ、かやらの古歌を用ふるも
まゝ世の常の事也。人あまねく知らず。みだりにとくべからず
井手の山吹并かはづ
或人語りていはく、事の縁ありて井手といふ所にまかりて、一
宿つかまつりたる事侍りき。所の有様、井手河の流れたる体、心
もおよび侍らせ。かの井手の大臣の跡あれば、ことわりあれど
河に立並びたる石も、十余丁ばかり、さのみや、遠くたて
おきけん。石毎にたいおはざりの如く、見えず。わざと立てた

へしさてあまた
例證を引て三種
にあらざる由な
り此正しけれ
へくはほつ

ふがはらけの
土器なり
小

よくいてくる
田の稲のよく
いり出来るを
ふその草を肥
にすふるへし

るやうにせん侍りし。そこに古老の者の侍りしを語ひて、昔の
事をも尋ね侍りしついでに、井手の山吹とて名に流れたるを、
いと見え侍らぬの、いづくよあるぞと尋ね侍りしかば、さる事
侍りかの井手の大臣の堂の、一年焼け侍りにき。その前におひ
たしく大きき山吹、むらく見え侍りき。その花の輪のこ
がはらけの大きさにて、幾重ともかく重りしかん侍りし。それ
をさやうに申しおきて侍るにや。又かの井手河の汀につきて、
ひまもかく侍りしかば、花の盛に、黄金の堤ををつき渡し
たらんやうよて、他所にのすぐれてせん侍りし。さればいづれ
を申しけるにか、今わきがたく侍り。たゞし下臈のいふかひを
く侍る事のかく名高き草とて、所もかき侍らず。田作りに、草
入れたるが、よくいでくると申して、何ともかく蒔りとり侍り
し程に、今の跡もかくせんありて侍る。それにとりて、井手のか

はづと申す事こそ、やうある事にて侍れ。世の人思ひて侍るの、
たゞかへるの、みあかはづといふぞと思ひて侍るめり。それも
たがひ侍らず。されどかはづと申すかへるの、外に、更に侍ら
ず。たゞこの井手河にのみ侍る也。色黒きやうにて、いと大きに
もあらず。世の常の蛙のやうに、あらはにをとりありく事やと
もいとも侍らず。常に、水にのみすみて、夜更る程にかれが鳴
きたるの、いみじく心すみ、ものあそれある聲にて、せん侍る。春
夏の頃、必ずおとして聞き給へと申し侍りしかど、その後とか
くまぎれて、いまだ尋ね侍らずとせん語り侍りし。この事心に
まみて、いみじくおぼえ侍りしかど、かひかく三年に、あり侍
りぬ。年たけあゆみかおとすして、思ひあがら、いまだかの聲を
聞かず。かの登連が雨の日に急きいでけん、たゞへかく事
ん。これを思ふに、今より末さまの人、たゞひおのづから事の

便ありて、かしこに行き臨みたりとも、心とめて聞かんと思へる人もすくおかるべし。人のすきとあさけとの、年月にそへて衰へゆくゆゑなり。

關の清水

或人のいはく、逢坂の關の清水といふの、走井とおおし水ぞと、あべて人知り侍るなり。玄かにあらず、清水の別の所にあり。今の水もあければ、そこ知れる人だにあり。三井寺に圓寶房の阿闍梨といふ老僧、たゞ一人其所を去れり。かゝれどさる事や知りたると尋ぬる人もなし。我死なん後の、玄る人もなくてやみぬべき事と、人に逢ひて語りけるよし傳へきゝて、かの阿闍梨知れる人の文をとりて、建曆の初の年十月廿日餘の頃、三井寺へゆく。阿闍梨對面して、かやうに古き事を聞かまほしくする人も難く侍るめるを、珍しくせん。いかでか忘るべ仕らざ

らんとして、伴ひゆく。關寺より西へ二三丁ばかり行きて、道より北のつらに、少したちあがれる所に、一丈ばかりなる石の塔あり。その塔の東へ三段ばかりいたりて、くぼめる所の則ち昔の關の清水の跡あり。道よりも三段ばかりや入りたらん。今の小家のまゝりへになりて、當時の水もなくて見どころもなけれど、昔のなごりおもかげに浮ひて、優にせんおほえ侍りし。阿闍梨語りていはく、この清水にむかひて水より北に、薄檜藪葺きたる家、近くまで侍りけり。たれ人のすみかどのまらねど、いかにもたゞ人の居所に、あらざりけるおめりどうかたり侍りし。

貫之が家

或人云、貫之が年頃住みける家の跡、蟹田の小路よりの北、富の小路よりの東のすみかり。

ちまき柱に物
なまきつけたる
にや

ふうし封じに
晴明の陰陽道
の至る人ふれ
災神を封しこ
めたるをいふな
り

業平が家

又業平の中將の家、三條の坊門より南、高倉より西に、高倉か
もてに近くまで侍りき。柱なども常にも似ず。ちまき柱といふ
物にて侍りけるを、いつ頃の人のまわぎにか、後に例の柱のや
うに、けづりおしてあん侍りし。おげしも皆丸に、かどもあくつ
いかりて、まことに古代の所と見え侍りき。中頃晴明がふうじ
たりけるどて、火にもやけずして、そのひさしさありけれど、世
の末に、かひあく、一年の火に焼けにき。

周防内侍が家

又周防の内侍の、我さへのきのまのぶ草とよめる家の、冷泉堀
河の北と西との隅なり。

あさもがとの明神

丹波國與謝の郡に、あさもがとの明神と申す神います。國の守

神拜とかやいふ事にも、御幣をぞ得給ひて、數まへらるゝほど
の神にて、うおはすある。これハ昔浦嶋の翁の神に、おれるとあ
んいひ傳へたる。いと興ある事あり。物さわがしく、匣をわけし
心に、神と跡を、とめ給へるゝ、さるべき權者などにや、ありけ
ん。

關明神

會坂に關の明神と申す、昔の蟬丸の、かの藁屋の跡をうしお
とすして、そこに神とありて、住み給ふあるべし。今もうち過ぐ
る便に見れば、昔深草の帝の御使にて、和琴からひに、良峰宗貞
卿少將とて、かよひけんほどの事まで、おもかげにうかびてい
みじくこそ侍れ。

和琴のおこり

或人云、和琴のおこり、弓六張をひきあらしめて、これを神樂に

濟物の買物ない

用以けるを煩しどて後の人琴につくりうつせると申し傳へたるを、上總國の濟物の古き注し文の中に、弓六張とかきて、注に御神樂料とかけりとぞいみじき事あり。

中將垣内

河内國高安郡に、在中將の通ひけるよし、かの伊勢物語に侍りき。されどその跡いづくとも知らぬを、かしの土民の説に、その跡さだかに侍るとぞいみじき中將の垣内と名づけたる、すあはちこれあり。

人丸墓

人丸の墓、大和國にあり。初瀬へまゐる道あり。人丸の墓といひて尋ぬるに、知れる人もあし。かの所に、歌塚とぞいふあり。

貫之躬恒勝負

非違ハ檢非違使ナリ

勝負さらんこハ其優劣の勝負を定めんとてさハ御けし給はるハ御意を伺ひ奉りたる也

おほやう云々大

俊恵法師語りていはく、三條の大相國非違の別當ときこえける時、二條の帥と二人の人、躬恒貫之が、おどりまさりを論せられけり。かたみにさまく詞をつくして争はれければ、更よこどさるべくもあらざりければ、帥いふかしく思ひて、御けしきをとりて、勝負さらんとて、白河の院に御けしき給はる。仰に云、我のいかでか定めん。俊頼を問へかしと、おほせ事ありければ、共にその便を待たれるは、二三日ありて、俊頼まゐりたりけり。帥この事語りいで、はじめ争ひはじめたるより、院の仰のおもひきまで語られければ、俊頼さへて、たびくうちうちあづきて、躬恒をバああづらせ給ひそといふ。帥思ひの外に覺えて、されバ貫之が劣り侍るか、事をさきり給ふべきありとせめられければ、猶唯同じやうに、躬恒をバああづらせ給ふまじきぞといはれければ、おほやうことながら聞え侍りにたり。

方俊頼のいはる
實之に劣らぬ
りたる事わ
らき事思ひた
りとの意也
くつハ傀儡に
て遊女をいふ
鏡の宿ふり
鏡の宿ふり

かのがまけにありぬるにこそとて、からき事にせられけり。
まことに躬恒がよみうち深く思ひ入りたる方、又たぐひな
きものあり。

俊頼が歌をくいつがうたふ事

ふけの入道殿に俊頼朝臣候ひける日、かゝみのくいつをま
ゐりて、うたつかうまつりけるに、かみ歌になりて、

いたりくにつ
りふ俊頼の歌遊
女ふどの口にま
て入りたるをい
ふなるへし

世の中の憂身にそへる影、おれや思ひ捨れを離れざりけり
この歌をうたひ出でたゆめければ、俊頼いたりくにつにけりおと
て、ゐたりけるおんいみじかりける。永縁僧正このことをつた
へき、て、うらやみて琵琶法師をもをかたらひて、さまざまも
のどらせおとして、わがよみたるいつもとつ音のこゝちこそ
すれといふ歌を、こゝかしこにてうたせければ、ときひと
ありがたきすき人とおんいひける。いまの教頼入道、またこれ

つせためい貴めた
つるをいふ

をうらやましくやかもひけんもの、のどらせずして、盲目をも
にうたへくどせためうたせせて、世のひとにわらされける
とぞ。

同人歌中に名字をよむ事

うちまはぶきハ
咳をする也
まのひやかハ
他にもしれきハ
てわやうに小聲に
ていふなり

法性寺どのに會ありけると、俊頼朝臣まゐりたりけり。兼昌
かうしにてうた讀みあやるに、俊頼のうたに名をかゝざりけ
れば、見あせせてうちまはぶきて、御名いかにとまのひやか
にいひけるを、たい讀みたまへといはれければ、よみけるうた
に、

卯の花の皆白髪とも見ゆる哉、賤が垣根もとしよりにけり
と、かきたるを、兼昌またあきして、頻にうたつきづゝめで感じ
けり。殿さかせたまひて、召して御覽じて、いみじう興せさせ給
ひてけりとぞ。かの三首の題を、歌ひとつによみたりけん心ば

またなきハ舌う
ちして響むる也

五條三位入道ハ
藤原俊成卿あり

せにのや、まさりてこそ侍れ。

三位入道基俊弟子に成る事

五條三位入道談て云、そのかみ年廿五にありし時基俊の弟子にあらんとて、和泉前司道經を赤かたちにて、かの人と車にあひのりて、基俊の家にゆきむかひたる事ありき。かの人そのとき八十五あり。その夜八月十五夜にてさへありしかば、亭主殊に興に入りて、歌の上の句をいふ。

赤かのあきとをかいつかの月を見て

と様々しく赤がめいでられたりしかば、予是をつぐ。

きみがやせよて君とわかさん

とつけたるを、何のめづらしげも赤きを、いみじう感せられき。さてのどかに物語して、久しう家にこもりぬて、今の世の人のありさま赤せもえ知り給へず。此頃たれをかもの知りたる人

のしり給へずハ
基俊みづからま

らぬよし也

膝をたゝき云々
の得意のありま
まをいふ意なり

にのつかうまつりたるどとされしかば、九條大納言伊豆中院大臣 雅定赤心をこそ、心にくき人への思ひて侍るめれと申し、かば、あかいどほしどて、膝をたゝきて、扇をかんだかくつかえれたりし。かやうに師弟の契をば申したりしかば、よみくちにいたりて、俊頼にねよぶべくもあらず。俊頼いとやんごと赤きものありとぞ。

俊頼基俊いとむ事

或人云、基俊の俊頼をば蚊虻の人とて、さのいへども駒の道ゆくにてこそあらめといえければ、俊頼のかへりきゝて、文時朝綱よみたる秀歌を、躬恒貫之つくりたる秀句を、しとぞのたまひける。

腰句終のて文字を難する事

またいとく雲居寺の聖のもとにて、秋のくれのこゝろを俊頼

蚊虻

朝臣

まよふるに
ては俊頼の歌な
りと思ひてさ也
いざむははりあ
ふ批難するなど
の意なり

櫻ちる云々紀朝
臣の名歌にて名
高きうた也
色まさな顔色
の眞奇にありた
る也

明ぬとも猶秋風の音づれて野へのけしきよ而がとりす赤
名をかくしたりけれども、これをさよと心得て、基俊いどむ人
にて、難じていとく、いかにも歌のこしの句のすゑにて、文字す
ゑつるのはかくしき事さし、さへていみじくさくにくき
物ありと、口わかすべくもあく。難せられければ、俊頼のともか
くもいはれざりけり。その座に伊勢のさみ琳賢がゐたりける
あな、異様ある證歌こそ、ひとつおぼえ侍れといひいでたりけ
れば、いでくうけたまはらん。よも事よるしき歌にあらは
といふに、
さくらちる木のまた風のさむからで
ととのて、文字をさがくどあがめたるに、色まささをにあり
てものもいはす、うつぶきたりけるときに、俊頼まのひにわら

それける。

琳賢基俊をたばかり事

いかかりけるにか、かの琳賢と基俊と中のあしかりければ、た
ばかりと思ひて、ある時後撰の歌の中に、人もいとまらさず、耳
をほぎがかぎり、甘首をえりいだしてかきつがひて、かの人の
もとへもていにけり。こゝに人の異様ある歌合をして、勝負を
知らまほしくつかうまつるに、判つけて給えらんとてとりい
でたりければ、これを見て、後撰の歌といふ事、ふつと思ひよら
ず。思ふさまにやうく難せられさりけるを、こゝかしこにも
てありきて、左衛門佐にわひ申しぬれば、梨壺の五人がはから
ひもものあらず。あはれ上古にもすぐれ給へる歌仙かき、これ
見たまへとて、輕慢しければ、見る人いみじうわらひけり。基俊
かへりさゝで、やすからず思されければ、かひあかりけり。

梨壺の五人は後
撰の搦者にて
坂上望城源順
時文大中臣能
清原文元補の
を云

基俊僻難する事

俊惠云、法性寺殿にて歌合ありけるに、俊頼基俊ふたり判者にて、名をかくして當座に判しけるに、俊頼歌に、
 口惜しや雲井隠れにすむたつも思ふ人に見えける物を
 これを基俊鶴と心得て、たづの澤にこそすめ、雲井にすむ事や
 のあると難じて、まけよあしてけり、されど俊頼その座にの言
 葉もくはへず、そのとき殿下、今宵の判の詞、かのく書きてま
 ゐらせよと被仰けるとき、俊頼朝臣是の鶴にのあらず、龍
 なり、かのあにがしとかやが、たつを見むと思へる心ざしのふ
 かゝりけるにより、かれが爲よ顯れて見えたりし事の侍るを、
 よめるありと書きたりけり、基俊弘才の人、かれを思ふはかり
 もあく、人の事を難する僻の侍りければ、事にふれて失おはく
 ぞありける。

艶書に古歌かく事

ある人女のもどよりふみを得たり、そのふみに歌二首あり、こ
 れかへしゝてたばせよとあつらへ侍るを見れば、この歌二首
 ちがら古今の戀の歌あり、かへしをすべきにもあらず、いか
 せましと思ひめぐらして、そのいはまほしき心にかあへるふ
 る歌二首をせん、をしへてかゝせて侍りし、この事あるふる
 き人よかたり侍りしかば、いみじき事あり、むかしの色どのみ
 のわざどもこのみてまけるわざあり、知らぬをおしはからひ
 たるが往事にかあへる、いうあることありとせん、感じ侍りし
 あり。

女の歌よみかけたる故實

勝命談て云、まかるべき所をゆにて、無心ある女房あとの歌よ
 みかけたる、無術事多かり、それへの故實のある也、まづえさか

たはせよの給は
らせよの意也

そらおぼめき
かぬよしする世

ふま宮仕人生々
かゝる宮仕人あり
されたる風流に
まやれる意也

ふしさし云々よ
もやさやうに
思ひ給ひすあら
んといふ意也

心づきあき俗に
氣にくわぬ思ひ
つきわなさい
ふ意あり

ぬよしに、そらおぼめきしてたび／＼問ふ。されば後にハ耻ま
らひて、さだかにもいはず。これをあつかふほどに、かへし思ひ
えたればいひつよみうべくもあらねば、やがておぼめきてや
みぬる、ひとつの事あり。又あま宮仕人にもあれ、さるべきざれ
たる女おぼの、をへごとく名づけて、きゝも知らぬ歌の二両句
おぼをいひかぐる事あり。もし心得たらばいかにもいひつべ
し。まらぬ事あらば、たゞよもさもさしもおぼされじおぼ、うち
いひであるべし。これのいひかたにもたがをぬ事あり。深く思
ふといふ心にも、うしつらしといふ心にも、おのづから通用ま
つべし。心づきあきよしいひたらんにぞ、心をやりたるやうお
るべけれど、それもざれたるたとふれに、いひおせるさまにも
ありぬべきあり。

猿丸大夫の墓

券ハ庄の借付を
いふ

黒主ハ大伴の黒
主なり

或人云、たかかみのまもに、そつかといふ所あり。そこに猿丸大
夫が墓あり。庄の境にて、その券にかき載せられたり。みか人知
れり。

黒主神に祝ふ事

志賀の郡に、大道よりすこし入りて、山際に、黒主の明神と申す
神います。これの昔の黒主が神にされるあり。

喜撰が跡

またみむろのむくに、廿余丁ばかりやまをかへ入りて、宇治
山の喜撰が住みけるあり。いへんおければ、堂のいしすゑ
おぼさだかにあり。これらかあらすたづねて見るべき事也。

ゑのはの事

ある人いそく、宮内卿有賢朝臣、時の殿上人七八人あひともあ
ひて、大和國葛城のかたへあそびにゆかれたることあり。その

あせてハ水の潤
れたるをいふ

時あるところにあれたる堂のおほきにやうくしきが見え
ければ、あやしくてその名を逢ふ人ごとに問ひければ、知れる
人もあかりけり。かゝる間に、このほかに髪白き翁ひとりま
みえけり。これのしもやうあらんとてたづねければ、これをバ
豊浦の寺とぞまうすといふ。人々いみじきことありと、かへす
く感じて、さるにていもしこの邊に、糸のみるといふ井やあ
ると問ふ。みあわせて水も侍らねと、跡の今に侍りて、堂より
西いくほとあらぬほとに行きてをしへければ、人々興に入り
て、やがてそこにむれるて、葛城といふ歌數十篇うたひて、この
翁に衣をもぬぎてかづけたりければ、おぼえぬ事にあひて、よ
ろこびかしこまりて去りにけるとぞ。ちかく土御門内大臣家
に、月ごとに影供せらるゝこと侍りしころ、まのびて御幸あど
ある時も侍りき。その會に、古寺月といふ題にて、よみてたてま

外ほえぬ事あり
外の事の意なり

つりし

ふりにける豊浦の寺の糸のさるに赤は白玉を殘す月かあ
五條三位入道これを書きて、やさしくもつかうまつれるかあ。
入道がまかるべからん時どりのいでんとおもふ給へつるを、か
あしくせんせられにたりとて、まきり又感せられ侍りき。この
事催馬樂の詞なれば、たれも知りたれと、まれよりさきに、歌
によめる事も見えず。その後こそ、冷泉の中將定家の歌によま
れて侍りしか。

せんせられハ先
せられたり也

歌半臂句

俊惠物語のついでに問ひて云、遍昭僧正歌に、
垂乳根のかゝれとてしもうば玉の我黒髪を撫すや有けん
この歌のまかに、いづれの言葉か。ことにすゝれたる、おぼえん
まゝにのたまへといふ。予いとく、かゝれとてしもといひて、鳥

けすらひ疑する
意にてそのあり
さま具合ふとい
ふ意にいへり
ふれなはれり
るやすめの句な
いふ

羽玉のとやすめたるはせこそ。ことにめでたく侍れといふ。か
くかか〜はやく歌のさかひに入られにけり。歌よみのかや
うのことにあるぞ。それにどりて月といはんとして、ひさかたど
かき山といはんとしてあしびきといふ。つねのことあり。され
どとじめの五文字よてり。させる興なし。こしの句によくつ
けて、言葉のやすめにかきたるの、いみじく歌のまなもいでき、
ふるまへかけずらひともあるあり。ふるき人これをば半臂句
とぞいひ侍りけるはんひ。させる用あきものあれど、装束の
中にかざりとあるものあり。歌の三十一字いくはせもあき中
に、思ふ事をいひきりめん。に、ひさしきことをば、一文字あり
ども増すべくもあらねど、この半臂の句の、かからずまきとあ
りて、すがたをかざるものあり。すがたに花麗さとまりぬれば、
おのづからまた餘情とある。これをこゝろ得るをさかひに入

せんかひ所詮の
にてつまりの
さいふ盛なり
まふこゝと眼目
なり
そも〜くさいふ
洞つかひさまた
かへるやうなれ
ごまの條とつら
す上の條とつら
さいはんとて二
條にふしたるに
て見えたるに
ん侍りしそも
もつ〜く文世
つれは半臂句の
ついきにて蘇合
けさあるへし
けつるへし

るといふべし。よく〜この歌をわんじて見たまへ。半臂の句
も、せんいつぎのことぞ、まかこいた〜としてしもといふ四文字
あり。かくいはすの半臂せんかからましとこそ、見わたれとあ
ん侍りし。

蘇香姿

そも〜樂の中に、蘇香といふ曲あり。これを舞ふに五帖まで
帖々をきれ〜に舞ひをとりて、後ばを舞ふ。やがてついで
急をまふべきよ、急のとせめ一反をば、まことに舞ふことあり。
かたのこどく。拍子ばかりに足を踏みあわせて、うちやすめの
、二反のとせめより、うるとしく舞ふあり。このけすらひのた
がとぬ半臂の句のこゝろあり。歌と樂とみちことあれど、めで
たきことのおのづからかよへるあるべし。かよとして知らざ
らん人の、おにかいおもひ分かん。歌のこどく兩方をこゝろえ

て、おもふために興あることあり。されば蘇香をば、半臂の句
ある舞といひ、この歌のさまをば、蘇香すがたともいひてんか
し。

上の句劣れる秀歌

俊恵云、歌ハ秀句を思ひえたれども、とすゑいひかきふる事
かたきあり。後徳大寺左府の御歌

奈吳の海の霞のまよりあがむれハ入日をあらふ沖つ白浪
頼政卿歌に、

住よしの松のこまよりあがむれば月おちかゝる淡路島山
このりやう首ともにかみの句おもふやうあらぬうたあり。い
り日をあらふといひ。つき落ちかゝるなどいへる。いみじきこ
と。バあれども、むねこしの句をバえいひかきへず。遣こんのこと
あり。

むねすゑの歌の
上の句下の句を
いふ

むねふしの句胸
の句ハ二の句を
いひ腹の句ハ三
の句をいふ

歌詞糟糠

二條中將雅經談て云、歌にハ此文字のなくもがなとかほはる
事のあるあり兼資といふものハ歌に、

月の知るやうきよの中のとかあさを詠めても又幾回りとい
これのよろしくよめるにとりて、よの中の中といふふた文字
が、いみじうわるきあり。たいうきよのはかなさをといとまほ
しきなり。又頼政卿歌よ、

まみのぼる月の光に横されてわたるあきさの音の寒けさ
これもひかりといふ三文字のわるきあり。月に横されてとあ
らバ、いまずこしきらくしく聞ゆべきなり。この言葉をバ歌
の中の疵とやいふべからん。深く思ひ入れざらん人の、わきま
へがたじ。

歌をいたくつくるへバかならず劣る事

さめにあはぬ
さりにさめもさき
歌也
さいくみてい細
かにたくむ意ふ
り
ものめかしはふ
しありけなる意
なり

覺盛法師がいはく、歌のあらしく、どめもあどぬやうなる
ひとつのすがたあり。それをあまりさいくみてどかくすれば、
はてにのまれくものめかしかりつるところさへ失せて、あ
にてもさきものになるなりと申し、さもときこゆ、季經脚
歌に、

年を経て返しもやらぬ小山田の種かす人もあらじと思ふ
この歌えんなるかたこそあけれと、ひとふしいひて、さるてい
の歌と見たまへしを、とし經てのちかの集のあかに侍るを見
れば、

賤の男が返しもやらぬ小山田にさのみいがかゝ種をかすべさ
これのあはされたりけるにや、いみじうけおとりておぼえ侍
るあり、よくく心すべき事にこそ、

依秀句心おとりする事

圓玄阿闍梨といひし人の歌に、

夕ぐれにあにはの浦をあがむれば霞にうかふ沖のつり舟
このうたのいうされど、ぬしこそおとりせらるゝうたあり。
そのゆゑのかすみにうかぶおきのつりぶねといへる、わりな
きふしをおもひよりあんにとりて、いかいゆふぐれにあに
このうらさをあがむればといふ、上の句をばおかん。まことに無
念よ見どころもさきことばつゝさきあり。かれおなじうらあり
とも、ゆふぐれなりとも、めづらしきやうに、おももふどころあ
りて、ついでくるかたも侍りあんものをと、さほせに手づゝはて、
いかにしてまもの句をば、おもひよりけんにかとおぼえとん
へり。

案じ過して成失事

愚詠中に

時雨にいつれなくもれし松の色を降變てけり今朝の初雪
これを俊惠難じていさく、たゞつれなく見えしといふべきか
り、あまりにわりなくわかせる程に、かへりて耳とまるふしと
なれるあり、ある所の歌合も霞を、俊惠歌に、

夕きぎに由良のとわたる蟹小舟霞のうちにてきぞ入ぬる
そのたびの會に、清輔朝臣たゞおなじやうによみたりしにと
りて、かれハ霞のそこにとよめりしを、人の入る海かとおぼゆ
と難じ侍りしなり。のさある所を、たゞ世の常にいひ流すべ
きを、いたく案じすゞしつれば、かへりて耳とまるふしとある。
たどへばいとをよる人の、いたくけうらによらんとよりすゞ
しつれば、ふしとあるが如し。これをよくはからふを上手とい
ふべし。風情ハおのづからいでくるものされば、程につけつゝ
求めうる事もあれど、かやうの事に上手にて、そのけぢめハみ

のさハのさく
さハのさばるさ
さハのさばるさ
すハの義にて意氣
揚々の意也大諸
禮にのさけさも
見えたり
けうらハきよら
の轉したるにて
清らの意なり

ゆるなり、さればゑせ歌よみの秀句に、多くハたらぬ所のい
でくるぞかし。

静縁こけ歌よむ事

静縁法師みづからが歌をかたりて云、

鹿の音をさくに我さへ泣れぬる谷の庵ハすみうかりけり
とこそつかうまつりて侍れ。これいが、侍るといふ、予いとく
よろしく侍り、たいしなかれぬるといふ言葉こそ、あまりこけ
すぎて、いかにぞやおぼえ侍るといふを、静縁いとく、そのこと
ばをこそ、この歌の詮とハ思ふたまふるにこそ。この難ハこと
のはかにおぼえ侍るとていみじくわろく難すと思ひげにて
さりぬ。よしなくおぼゆるまゝにものをいひて、こゝろすべか
りけること、くやしくおもふほどに、十日ばかりありて、また
來りていふやう、ひと日の歌あんとたまひしを、かくれどとな

こけ今も俗にふ
けさいふ詞に其
意大かたひとし

かくれどとな
れたる事なり

なでうい何さて
の意あり
けしたふめられ
ハ批難せられて
の意なり
はしたふめられ
はいちめられた
るさの意也

しこゝろえぞ思ふたまへていふかしくおぼえ侍りしまゝに
さのいふとも大夫公のもとに仰きてこそわがひがこそをお
もふか人のあしく難じたまふかこそいきらめとおもひて行
きてかたり侍りしかばなでう御房のかゝるこけ歌よまるゝ
ぞとよあかれぬるといなにこそぞさまでなのこゝろねやと
なんはしたなめられて侍りしさればよく難じたまひけりわ
があしくこゝろ得たりけるぞとおこたりまうしにまうでた
るなりといひてかへり侍りきこゝろのきよさこそありがた
けれ。

代々戀中秀歌

俊惠かたりて云故左京大夫顯輔かたりて云後拾遺の戀の歌
の中にも
夕暮の侍れしものを今のたゞかくらん方を思ひこそやれ

けしういあらす
い見ぐるしくわ
るくはふしこの
意あり

これをおもて歌と思へり金葉集にも
待し夜の更しを何に歎きけん思ひ絶てもあられける身を
これをすぐれたる歌とせり我えらへる詞花集にも
忘らるゝ人目ばかりを歎みて戀しき事のあからましかば
この歌をかのためひにせんとあん思ひ給へるいとかれらに
もおとらすけしういあらすこそ侍れといとれけりまかある
を俊惠が歌苑抄のあかにい

一夜とてよかれし床のさ筵にやがても塵の積りぬるかあ
これをなんおもて歌とれもふ給へるいかい侍らんとぞ今こ
れらに心づきて新古今を見れば我心にすぐれたる歌三首見
ゆいづれともわきがたし後の人可定

かくてさの命やかぎり徒に寝ぬ夜の月のかげをのみ見て
野への露の色もあくてやこぼれつる袖より過る萩の上風

へ侍りし事あり。この事をたもてる者しにや。さすがに老とてたれど、俊恵のよみくちあらずと申す人のあきぞかし。又異事にあらせ。この故實をあやまたぬ故あり。

非歌仙歌を難じたる事

歌の名にながれたる歌よみあらねど、ことわりを先として耳近き道あれば、あやしの物の心にもおのづから善悪の聞ゆるあり。長守かたりて云、述懐の歌どもあまたよみ侍りし中に、ざれど歌に、

火起さぬ夏の炭櫃の心ちして、人もすさめすすまじの身やどよめるを、十二にゐる女子のこれをきゝて、冬のすびつこそ火のなきの今すこしすさまじけれ。なごさのよみたまをぬぞと申し侍りしに、かきしく難せられてのぶるかたあくあんとかたりしこそ、げにをかしかりしか。

あやしの物の心
やしく心なき者
ないふ

いかにしくいかに
いかにしくいかに
なり

思ひあまる時自然によまる事

又心にいたく思ふ事になりぬれば、おのづから歌によまる也。金葉集に、よみ人あらずとて侍るとよ。

身のうさを思ひしとけ、冬の夜もどいこほらぬの涙也けりこの歌の、仁和寺の淡路阿闍梨どかいひける人の、妹の許なりけるなま女房の、いたく世をわびてよみたりける歌也。もどより歌よみならねば、又よめる歌もあした、思ふあまりにおのづからいとれたりけること。

範兼家會優ある事

俊恵が云、和歌の會のありさまの、げにしく優におぼえし事、つぎの所にとりてちかく、範兼卿の家の會のやうある事、あし。亭主のさる人にて、いみじうもてあして、事にふれつゝ、聊爾あらず。人に耻ぢ、道を執して、ほむべきを、感じ、そしる

けにしくつきた
らしくつきた
るを云
つぎの所の禁中
さて大臣家な
ごの會からで次
さまの所を云
聊爾あさひしき
意なり

めのかつけられて
目をつけらるゝ
と也

五條三位入道云俊惠の當世の上手なり。されど俊頼にのなほ
かよびがたし。俊頼のひまなく思ひいたらぬくまなく、一方お
らずよめるが力もおよばぬあり。今の世にの頼政こそいみじ
き上手あれ。かれだに座にあれば、目のかけられて、かれに事ひ
とつせられぬとおぼゆるなり。

無名抄目録下

頼政歌道にすける事

清輔弘才事

俊成自讃歌事

俊惠難俊成秀歌事

俊惠秀歌事

俊成清輔歌判皆有偏頗事

隠作者事

道因歌に志深き事

隆信定長一雙事

大輔小侍従一雙事

俊成卿女宮内卿兩人歌よみやうかはる事

具親歌を不入心事
 會歌にすがたわかつ事
 寂逆顯昭兩人事
 式部赤染勝劣事
 近代古躰事
 俊惠定歌躰事
 取古歌事
 假名書事
 諸浪名事
 あさりいさりの差別事
 五日かつみをふく事
 爲仲宮城野の萩ほりて上る事
 續實がすき事

小野小町事
 どこねの事

頼政歌道にすける事

後惠云、頼政卿のいみじかりし歌仙也、心の底まで歌になりかへりて、常にこれを忘れず心にかけてつゝ、鳥の一聲あき、風のそよどふくにも、まして花のちり、葉のおち、月の出入、雨雪などのふるにつけても、立ゐおきふしに、風情をめぐらさざといふことありし。誠に秀歌の出くるも理とぞおぼえ侍りし。かゝれば然るべき時名をあげたる歌ども、おほくの擬作にて有りけるとかや、大かたの會の座につらかりて、歌うち詠じ、よきあしきことわりあせられたる氣色も、深く心にいれる事と見えて、いみじかりし。かの人のある座にて、何事もはえあるやうに侍りしなり。

清輔弘才事

勝命云、清輔朝臣歌の方の弘才の、肩あらふ人あし、いまだよみ

然るへき時ハ晴
の大事の時なご
をいふ
擬作といはれて
ふつくりわくをい

もおよばじとおぼゆる事を、わざとかまへてもとめ出てたづぬれば、みおもとより沙汰しふるされたる事どもにてなん侍りし。はれの歌よまんとして、大事のいかにも古集を見てこそといひて、万葉集をかへすく見られ侍りし。

俊成自讃歌事

俊惠云、五條三位入道の御許にまうでたりしついでに、御詠の中に、何れをかすぐれたりとおぼす。人のよそにてやうくよさたし侍れど、それをバ用ひ侍るべからず。まさしくうけ給はらんと思ふと聞えしかば、

夕されば野への秋風身にしみてうづらさくあり深草の里
これをせん身にとりての、おもての歌と思ひ給へるといはれしを、俊惠又いはく、世にあまねく人のよし侍るの、

おもかげに花の姿をさきだて、幾重こえきぬ峰のまら雲

いさか否にて知らぬ意なり

申さつゝのついでに、歌のついでに、文なるをその歌の標したるよし、なりまく切りたる、けて心得へし

これをすぐれたるやうに申し侍るの、いかゞときこゆいさよそに、いさもや定め侍らんまら給はず。おほみづからいさまの歌に、いひくらぶへからずとぞ侍りしとかたりて、これをうちくしし、

俊惠難、俊成、秀歌事

かの歌の、身にまみてといふ腰の句の、いみじう無念に覺ゆるなり。これほどにありぬる歌の、けしきをいひあがして、たい空に身にしみけんかしと思はせたるこそ、心にくくも優にも侍れ。いみじくいひもてゆきて、歌の詮とすべきふしを、さばくといひあらはしたれば、むげに事淺くなりぬるありとぞ。

俊惠秀歌

其次に我歌の中に、

三吉野の山かさくもり雪ふれば麓の里のうちまぐれつゝ

これをきんかのたぐひにせんと思ふ給へる。もし世の末に、おぼつかなくいふ人もあらば、かくこそいひしかと語り給へどぞ。

俊成清輔歌判皆有偏頗事

人のかたふく事
人の首をかたふく
ふけ不審する事
ふり
けしきをあやま
り顔色をかへ
て争ふ事也

顯昭云、此頃和歌の判、俊成卿清輔朝臣無左右事也。まかるを
どもに偏頗ある判者あるにとりて、そのやうかはりたる者、
俊成卿、我もひが事をすと思へるけしきにて、いともあらが
はず。世の中の習ひあれば、さなくともいかいかなどやうにい
はれき。清輔朝臣、外相のいみじう清廉なるやうにて、偏頗と
いふ事つゆもけしきにあらはさず。かのづから人のかたふく
事なともあれば、けしきをあやまりて、あらがひ論せられしか
ば、人の皆そのよしを心得て、更にいひいづる事もなかりき。

隠作者事

わもてにまくる
内々歌の善悪
わにきて人によ
りては表面勝を
ゆつらるゝよし
也

おほかたの歌を判せるに、作者をかくすといひ者がら、ひとへにまらぬもゆゝしき大事あり。人名あらはれたるものは、からはしく、おもてにまくる事おほかり。かくせるやうにて、うちくにいさゝか心得たるが、めでたきあり。

道因歌に志深き事

まめやかに
實ふり

かちより
にの意也

此道に心ざしふかゝりし事、道因入道あらびなき物なり。七八十になるまで、秀歌よませたまへと祈らんために、かちより住吉へ月まうでまたる、いとありがたき事也。ある歌合に清輔朝臣判者にて、道因が歌をまかしたりければ、わざと判者の許にまうで、まめやかに涙をながしつゝ、泣き怨みければ、享主いはんかたなく、かばかりの大事にこそ、あはざりつれど、語られける。九十ばかりよきりて、耳きともおぼるきりけるにや。會の時の、殊更講師の座のきはにわけよりて、わきもどにつと

みつはさせるは
年若て齒のぬけ
たるか再ひ瑞齒
の出来るをいふ
こゝろにたゝるの
るなへるのみ

そひゐてみづはさせる姿に耳をかたふけつゝ、他事あぐさ、
けるけしきなど、なはざりの事と見えざりき。千載集えらば
れ侍りし事の、かの入道うせて後の事なり。されどあきあどに
もさしも道に心ざしふかゝりし物ありとて、優して十八首を
入れられたりけるに、夢の中に来りて、涙をあがしつゝ、よろこ
びをいふと見給ひたりければ、殊にわはれがりて、いま二首を
くはへて、廿首になされたりけるとぞ。まゐるし侍る事にこそ。

隆信定長一雙の事

近頃の隆信定長とつがひて、若くより人の口におきじやうに
いはれ侍りき。かの俊恵が家にて、百首を十首づゝ十度によみ
て、十度の百首と名づけたる事のありけるに、いとみておの
く、心をつくしたりけるに、いづれもおとらざりけり。又俊成
卿の十首よませ給ひける時も、ともよくよみたりければ、か

返抄したひつへ
くひ書付なも給
ひて一雙なるよ
しを証せんの意
あり返抄の請取
書にいふなるを
こゝろにたゝる
ちひたるなり

の卿よに人のひとつがひに申すよしきけと、何事かあらん
と思ひて過ぎつるに、この十首の歌にこそ、返抄もたびつべく
おぼゆれとあんにはれけるに、まかあるを九條殿右大臣とす
じ、時人々に百首をめされしに、隆信作者に入りて、公事なる
うちに、日數もあぐても、のさわがしかりければ、いとよろしき
歌もあかりけり。その頃定長の出家の後にて、身の暇もあり、い
ますこしのとやかに案じて、無題の百首を召きたてゝ、とりい
だしたりけるに、たとへしあぐ勝りたりければ、その時より寂
蓮左右なしといふにき。御所邊に、いかかるをこのも
の、同じつらのよみ口とつがひそめたるを、とまで、おぼせら
れたるとぞ。後に隆信からき事にしてはやく死あまししかば
さる程の歌仙にてやみなまし。よしなき命の長くて、かく道の
耻をあらはす事とぞいはれける。

大輔小侍従一双の事

近く女歌よみの上手にて、大輔小侍従とて、とりくにいばれ侍りき。大輔のいまずこし物をまきりて、ねづよくよむ方のまさり侍従の、花やかに目驚く所よみ据うる事のすぐれたりし中にも、歌のかへしする事、たれにもすぐれたりとす。本歌にいへる事の中に、さもありぬべき所をよく見つめて、それをかへす心バせの、ありがたきもなきぞとぞ、俊恵法師の申し侍りし。

俊成卿女宮内卿兩人歌のよみやうかはる事

今の御所に、俊成卿の女と聞ゆる人、宮内卿と二人の女房こそ、昔にも耻ぢぬ上手ともなれ。歌のよみやうこそ、事の外かはりて侍りけれ。人の語り侍りし、俊成卿の女は、はれの歌よまんとして、まづ日頃かけて、もろくの集をもと、くりかへしよ

火かすに、いさし火を暗くさしして也

志にはつれ死に、そふひさいふ俗言に同じ始に死のへかりしな

いみじかりて此も下の文につくへきをきりて具親云々と標出せるなり

せうごの兄也

具親歌を不入心事

せうごの具親少將兵衛佐の歌に心を入れぬをぞにくみ侍りし。何故に身をたてたる人されば、まかあをらん宿直所をまれくたち入りて見れば、はれの會あとのころも、弓よ引目よあ

せりこみて、細具前にすゑて、歌を大事と思はぬとて、口をしき事にぞいひ侍りし。

會歌に姿分つ事

御所に朝夕侍りし頃、常にも似せめづらしき御言ありき。六首の歌に、皆姿をよみかへて奉れとて、春夏のふとくおほきに、秋冬のほそくからび、戀旅のえんにやさしくつかうまつれ。これもし思ふやうによみおほせすのよしをありのまゝに申しあげよ。歌のさままされるほどを御覽すべきためありと被仰たりしかば、いみじき大事にて、かたへの辞退す。心よくからぬほどの人を、又もとよりめされずかへれば、まさしくその座にまゐりてつらかれる人、殿下、大僧正御房、定家、家隆、寂蓮、予とわづかに六人を侍りし。愚詠に、ふとくおほきある歌に、
雲さそふあまつ春風かどるなり高間の山の花さかりかも

からびの枯ひ也

打羽ふき今もあかかんほどしきす卯花月夜さかり更行くほそくからびたる歌

よひのまの月の桂のうすもみぢてるとしもあき初秋の空さびしさの猶残りけり跡たゆるおち葉が上に今朝の初雪艶にやさしき歌

忍ばじよまぼりかねつと語れ人物思ふ袖の朽とてぬまに旅衣たつあかつきの別れより去をれしはてや宮城野の露
寂蓮顯昭兩人の事

この中に春の歌をあまたよみて、寂蓮入道に見せ申し、時この高間の歌をよしとて黠あされたりしかば書きてたてまつりてき、既に講せらるゝ時に至りてこれをきけば、かの入道の歌に、同じく高間の花をよまれたり。我歌に似たらば、ちがへんを思ふ心もあく、ありのまゝにことわられけるいとありが

たき心ありしぞかし。さるの職の心ざまをば、いたく神妙なる人ともいはれざりしを、わが得つる道になれば、心ばへもよくあるなめり。そのかみ宣陽門院の御供花の會の歌に、床夏契久といふ題に、うごきななき世のやまと撫子とよめりしを、わ先達見て、我歌に似たり。よみかへよとあぢがちに侍りしかば、方かくて當座によみかへてきたとへなき心あり。そもく人の徳をはめんとする程に、我ため面目ありしたびの事を、長々とかきつゝけて侍るをかしく、されどもこのふみの得分に、自讃少々ませてもいかい侍らん。

式部赤染勝劣の事

或人云、俊頼の髓腦に、定頼中納言、公任大納言に、式部と赤染とが、おどりまさりを問はる。大納言云、式部のこやとも人をいふべきにとよめるものなり。一口口にいふべからずと侍れば、中

このふみの得分
に此書を物す
る得分に自讃を
ませしはんし
かましき事はい
るまじ也

こやとも人を云
やハ式部ハ歌を
いひてつかはる
歌あるもまされ
の意をこめられ
へたるあるべし

納言重ねていはく、式部が歌に、はるかに照らせ山の端の月といふ歌をこそ、世の人の秀歌と申し侍れといふ。大納言いはく、それぞ世の人のまらぬ事をいふよ。暗きより暗きに入る事の、經の文あれはいふにもおよばず。末の句のまたもとにひかれてやすくよまれぬべし。こやとも人をいふべきにといひて、ひまこそあけれ葦のやへふきといへるこそ、凡夫のおよびよるべき事にもあらねど、答へられけるよし侍るめり。これに二つの不審あり。一つに、式部をまさるよしことわられたれど、その頃のまかるべき會、晴の歌合あをを見れば、赤染をまさかりに賞じて、式部のもれたる事おほかり。一つに、式部が二首の歌を今見れば、はるかに照らせといふ歌の言葉も姿も、事の外にたけ高く、又けしきもあり。いかなれば大納言の、まかことわられけるにか、かた〜おぼつかなくな侍るといふ。予こ

ゝろみにこれを會釋す。式部赤染が勝劣の、大納言ひとりさだめられたるにあらす。世こぞりて式部をすぐれたりとおもへり。まかあれど人のまわさぬしのある世に、その人がらによりて、おどりまさる事あり。歌のかたの式部さうき上手なれど、身のふるまひもてあし、心もちなどの、赤染に、およびがたかりけるにや。紫式部が日記といふ物を見侍りしかば、和泉式部の、げしからぬ方こそあれど、うちとけて文走り書きたるに、その方のさまあるかたも、はかき言葉のよほひも見え侍るゆり。歌のまことの歌よみよのあらず。口にまかせたる事ども、かきらまをかきき一ふし、目とまるをよみそへ侍るゆり。されど人のよみたらん歌、難じことわりたらん、いでやさまでい心得じ。たゞ口に歌のよまるゝかめり。耻かしの歌よみやとのかばえず。丹波守の北方を、宮どのわたりなごに、まさひら

はつかしき天晴
ふる意なり
人さまにもけた
れらぬにひけ
めされて人々のほ
めさりしと也

衛門とぞいひ侍る。ことにやんごとなき程あらねど、誠にゆゑくしうぞ、歌よみとて、萬の事につけてよみちらさねど、きこえたる限の、はかなき折ふしの事も、それこそはづかしき口つきに侍れど、かけりかゝれば、その時の人さまにもてけられたる歌の方も思ふばかり用ひられねど、誠に上手ければ、秀歌も多く、事にふれつゝ、ひまあくよみかくはせに、撰集どもにもあまた入れるにこそ。曾根好忠といふもの、人数にもあらず、圓融院の子日の御幸に、推參をさへして、をこの名をあげたる物ぞかし。されど今の歌の方に、やんごとなきものに思へり。一條院の御時、みちくさかりなる事を、江師のまゐるせる中にも、歌よみに、道信實方、長能、輔親、式部、衛門、曾根好忠と、この七人をこそその記されて侍るゆれ。これも人からによりて、生ける世に、世の覺えもなかりけるあるべし。さてかの式部が歌にぞ